

## 同和問題（道徳）学習指導案

平成3年2月1日（金）第5校時

板野中学校 2年E組

男子19名，女子17名，計36名

指導者 阿部憲作

## 1. 主 題 人間に光あれ

資料『人間に光あれ』

出典「被差別部落のたたかい」 土方 鉄 著

## 2. 主題設定の理由

同和問題を語るとは、私自身の部落差別とのかかわりの歴史を子どもたちに語ることであり、自分という人間を見つめ、私の心の中にある差別の意識をどう変革してきたか、また、変革しようとしているのかを語ることである。まさに、同和問題にかかわって、自分の生き方を子どもたちにぶつけることであり、子どもたちと共に人間として生きることを求めることだ考える。同和問題を語る時、また一つ自分がより人間らしくなっていくんだという気持ちになる。同和教育は、一人一人の人間がより人間らしく生きるための、人間の幸福を求める教育である。板野中学校に赴任したとき、どれだけ被差別の立場に立って同和問題を語れるかが問われ、また、教師としての真価が問われているんだという気持ちで一杯であった。教師として、さらに一人の人間としてどう生きるのが最もすばらしいのかを、2年E組38人の一人一人と共に求めていきたいと願う。そこで学級目標に「人として」を掲げ、2年生のスタートを切った。

4月、詩「峠」（真壁仁）に学んだ。人の歩む道はまさに峠の連続である。その峠が険しければ険しいほど、励まし合い、支え合い、しかも確実な足どりで、目の前にある峠を38人で登っていこうと心を寄せ合った。また、過去の自分に別れを告げ、よりすばらしい現在の自分でありたい。そんな思いにあふれた学級でありたいと願った。

5月、「美しさを求めて生きる人生を」（佐藤文彦先生の講演より）を通して、まさに、美しさを求めて生きられた佐藤先生のすばらしい生きざまに学んだ。それは、私たちにとってかけがえのない命を、どう生かし輝かすのが最もすばらしい生き方なのかを求める道標となった。

授業後の感想に生徒が、「苦勞しながらでも負けないで、生き抜いてきた佐藤先生の生き方は、本当に美しいと思います。ぼくも、この佐藤先生のように生きてみたいです。」と書いてきた。「同和教育は生命なんだ」という言葉は、子どもたちに同和教育の重要性を、より深く認識させた。

6月、「渋染一揆」を通して、被差別の立場におかれた人たちの連帯による「人間が人間らしく生きたい」という生命をかけた人間解放運動に、共に人間らしい生き方を求めていこうとすることが、私たちが幸せに生きるために欠くことのできないことであることを学んだ。授業の中で、「私は部落出身だけど、もしこれから先、差別を受けることがあったとしても、差別

に負けずに堂々と生きていききたいと思います。」と語った仲間がいた。この仲間に他の子どもたちの心が動かされ、自分の生き方を見つめ、問い正すきっかけとなった。

同和問題を語る時、真実を求め目が光り輝く子どもと曇りがちな部落の子どもがいる。学級の子どもの中には、自分の差別性に気づき、自分の問題として自分の中で差別と闘っている子どもがいる。しかし、部落問題を自分のこととしてとらえることができない子どももいる。頭では理解できても、部落に対する暗いイメージが抜けられない子どもがいる。また、真剣に取り組めない生徒がいる。そんな学級の中では、部落の子どもたちは胸を張って自分を語ることはできない。「楽しく明るいクラスだ」と子どもたち自身、自分たちの学級を評価しているが、部落差別解消を目指した真の仲間の集団でなくては、本当の明るさと言えない。

11月、「私の目を見て！」を通して、部落差別と闘う勝子のすばらしい生き方と同時に、醜い愛子を通して自分を語った。私の差別性を明らかにすると同時に、差別者として、あやまりながら自分を語った。勝子に心が動いた生徒、そして、愛子に自分を見た生徒がいた。これをきっかけに、本当の部落問題学習が始まるんだという出発点になった。

『水平社宣言』は、すべての人間の自由・平等・尊厳を高らかに唱えた、世界に誇る日本で唯一の人権宣言である。資料「人間に光あれ」は、『水平社宣言』が、冷え凍るような厳しい差別や時代背景の中で、どのように奮き上げられてきたのかを事実にもとづいて書いている。真の基本的な人権と民主主義の確立を目指した人間解放運動の中に、長い間虐げられてきた部落の人たちの強さと優しさ、誇り、そして、美しく生きるための抵抗の精神を感じさせる。

全国水平社創立大会に至るまでの過程は、阪本清一郎、西光万吉、駒井喜作の3人を中心になされたが、解放運動を許さぬ厳しい時代背景に加え、政府の弾圧や冷酷なる差別、また、警察から追われ親からも悪人とされるといった数え切れない困難があった。それにもかかわらず、人間らしく生きたいという同じ苦しみを持つ人たちの支えと、すべての人間の自由・平等・尊厳という真理に支えられ、誇り得る運動が見事に展開されてきた。また、融和運動の本質を見抜き、自主的な集団運動へと発展させていくエネルギーに、人間尊厳の思想の深さと熱を感じさせられる。全国水平社創立大会を成功させた人たちに感動させられると同時に、人間の生き方と美しさを教えられる。また、14歳の少年山田孝野次郎がこの大会の最後に、「いま、わたしたちは泣いている時ではありません。」「おとなも子どもも、いっせいにたって、この悲しみの原因を打ち破ろう。光り輝く新しい世の中にしよう。」という呼びかけに、人間の魂を甦させられる思いがする。

全国水平社創立大会は部落の人たちに炎をつけ、水平社の組織は全国で1100を越えるまでになった。それほど深い思想と人間らしく生きたいという強い願いに貫かれている証である。

この大会に至るまでの時代背景と、それに屈せずと闘った部落の人たちの思想、生きざまをしっかりと捕らえたい。そして、『人の世に熱あれ 人間に光あれ』の絶叫でしめくられた『水平社宣言』がすべての人びとの幸福を願い、真実を貫き通した人たちによって生まれてきたことを忘れてはならない。どんな困難な厳しい状況にあっても決して屈しなかった部落の人

たちの生きざまから、私たちは、その力強さと熱いエネルギーを自分のものとしたい。自らの人間を解放すると共に、自ら部落差別を解消することがすべての人間の自由・平等・尊厳を確立させるんだという実感をつかみたい。すべての人間の自由・平等・尊厳の『光』を、2年生E組の一人一人が受け継ぎたいと願い、本主題を設定した。

### 3. ねらい

全国水平社創立大会が行なわれるまでの時代背景、差別の構造、過程をしっかりとらえると共に、人間らしく生きたいという同じ苦しみを持つ人たちの支えと、すべての人間の自由・平等・尊厳という真理に支えられ、どんなに厳しい状況の中でも決して屈しなかった部落の人たちの生き方に共感させたい。また、その生き方を自分の生き方にまで高め、部落差別解消に取り組む家庭・地域社会のリーダー的存在になりうる生徒を育てる。

### 4. 視点 真実と正義

### 5. 指導計画

(1) 常時指導 学級目標「人として」を合言葉に、自分を大切にすると同時に、他人を大切にすることを学級の思想とするよう、語りかけ、対話をし、人間らしく生きる生き方を求め続ける共感と連帯の絆で結ばれた学級集団を作る。

(2) 関連的指導 特活『理想に向かって進もう』・・・・・・・・・・1時間  
2年生も後半を迎えたこの時期に、自己の成長の跡をふり返り、その成長の度合いを自覚し、さらによりよい成長を目指そうとする意欲と態度を育てる。

(3) 核心的指導 道徳『人間に光あれ』・・・・・・・・・・3時間(本時3/3)  
すべての人間の自由と平等と尊厳を勝ちとるために、どんなに厳しい状況の中でも決してくじけることのない部落の人たちの誇りうる生きざまに共感させ、その光や抵抗のエネルギーを自分のものとさせる。

(4) 発展としての関連 特活『すばらしい生き方に学ぶ』・・・・・・・・・・1時間  
これまでの同和問題学習を通して、部落の人たちのすばらしい生き方から何を学んだか、また、自分は同和問題とかわかってどう生きるのかを話し合い、さらに、部落差別解消に向けて自分は何をすべきかを考え、実践する態度を養う。

(5) 常時指導(発展) 仲間の喜び悲しみを自分のこととしてとらえることができ、仲間の悲しみをみんなで幸せにかえていく集団を目指す中で、部落差別を自分の問題としてとらえ、さらに家庭・地域社会において部落差別解消に取り組める実践力まで高めたい。

## 6. 本時の指導

### (1) 目 標

すべての人間の自由と平等と尊厳を勝ちとるために、どんなに厳しい状況の中でも決してくじけることのなかった部落の人たちの誇りうる生きざまに共感させ、全国水平社創立大会に燈った部落差別解消の『光』を生徒一人一人の中に燈らせたい。そして、部落問題にかかわって自分はどう生きるのかを考えさせたい。

### (2) 展 開

学 習 活 動	主な発問と期待する生徒の反応	指 導 上 の 留 意 点
<p>①同情・融和運動ではなぜだめだったのかを考える。</p>	<p>○とくに米騒動のあと、融和運動が展開されるようになったが、そのことについてどう感じ、また、どうして融和運動では差別はなくならなかったと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・米騒動の鎮圧のために、融和運動をさらに推し進める政府のやり方に腹がたつ。</li> <li>・政府は部落の人たちのものすごいエネルギーに恐れた。</li> <li>・同情やあわれみでは本質的な部落差別の解消にはつながらない。</li> <li>・同じところにたつ水平の立場で部落差別を考えことにより、はじめて差別はなくなる。</li> <li>・米騒動と融和運動の反省をもとに、部落の人たちの完全解放は、秩序ある自主的な集団運動でなければならないと自覚した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米騒動を鎮圧するために、なお一層同情・融和運動が展開されていったことを理解させる。</li> <li>・絶対優位な立場から同情やあわれみをかける同情・融和運動の本質を見抜かせる。</li> <li>・人間の解放は、人間の尊厳という真理のもとに、自主的な秩序ある集団運動により勝ちとるものだというを理解する。</li> </ul>
<p>②阪本、西光、駒井を中心に人間解放運動が展開されていたが、幾多の困難に屈しなかったそのエネルギーに</p>	<p>○阪本、西光、駒井の3人を中心に、厳しい時代背景や政府の弾圧冷酷な差別に屈せずに、人間解放運動を貫き通したことをどう思うか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間の自由・平等・尊厳と</li> </ul>

<p>ついて考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの同じ苦しみを持つ人たちに支えられてがんばることができた。</li> <li>・人間らしく生きるための抵抗の精神に感動した。</li> <li>・人間は尊敬されるものなんだという真理に支えられ、がんばることができた。</li> <li>・差別に立ち向かう強さと優しさを感じる。</li> <li>・人間として誇りうる生き方である。</li> </ul>	<p>いう真理と同じ苦しみを持つ人たちの願いに支えられ、人間解放運動を貫き通した誇りうる生き方に共感させる。</p> <p>・人間として許されない、いわれなき差別に抵抗してきたそのエネルギーと優しさをつかませる。</p>
<p>③全国水平社創立大会に集まった人たちの願いについて考える。</p>	<p>○どんな思いや願いをもって、大会に集まってきたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ苦しみや悲しみをもつ人たちの人間らしく生きたいという願い。</li> <li>・最も虐げられてきた人たちの怒りの涙に学びたい。</li> <li>・すべての人間解放のために立ち上がる強いエネルギーを感じる。</li> <li>・どんな困難があっても団結して差別と闘うエネルギーを感じる。</li> <li>・水平社の炎を自分の中に燈したい。</li> </ul>	<p>・全国水平社創立大会に、自らが参加しているという実感をつかませると共に、部落の人たちの熱い願いに共感させる。</p>
<p>④少年、山田孝野次郎の言葉の意味について考える。</p>	<p>○山田少年の言葉についてどう思うか、また、私たちはその願いをどう受けとめるのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目の覚めるような感動的な言葉だ。</li> <li>・受けてきた差別に対して、歎くのではなく、訴えることなんだということ学んだ。</li> </ul>	<p>・歎くより、差別に対する怒りを、すべての人間の幸福を勝ちとるエネルギーに変えていこうとする力強い生き方に共感させる。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・光り輝く新しい世の中にするのは、私たち一人一人なんだということを学んだ。</li> <li>・自らが立ち上がり、団結しようとする生き方に学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人が自らを解放し、部落差別解消に立ち上がろうとする意欲を持たせたい。</li> </ul>
<p>◎「人間に光あれ」が私達にといかけているものは何か。また、同和問題にかかわってどう生きるのかを話し合う。</p>	<p>○「人間に光あれ」全体を通して私たちは部落差別とかかわってどう生きるのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人間は尊敬するものであり、その生き方において誇りうる生き方をしたい。</li> <li>・真実を貫いて生きて証としての「水平社宣言」を学びたい。</li> <li>・自由・平等・尊厳を求める人間らしい生き方が、人間を輝かせるということに気付いた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部落差別を解消するという集団に高めると共に、それが本当の連帯であることをつかませる。</li> <li>・「水平社宣言」を学ぶ意欲を高める。</li> <li>・人間尊厳を貫く意欲を高める。</li> </ul>

### 『人間に光あれ』学習プリント

1. とくに米騒動のあと、融和運動が展開されるようになったが、そのことについてどう感じ、また、どうして融和運動では差別はなくならなかったと思うか。
2. 阪本、西光、駒井の3人を中心に、厳しい時代背景や政府の弾圧、冷酷な差別に屈せず人間解放運動を貫き通したことをどう思うか。
3. どんな思いや願いをもって、全国水平社創立大会に集まってきたと思うか。
4. 山田少年の言葉についてどう思うか。また、わたしたちはその願いをどううけつごうと思うか。
5. 『人間に光あれ』全体を通して、私たちは何を学び、また、部落差別とかかわってどう生きようと思うか。

【授業記録】

2年E組『人間に光あれ』授業記録

1991年2月1日(金)5時限

指導者 阿部憲作

T<sub>1</sub>: はじめます。

奥谷: 姿勢, 起立, 礼, 着席。

T<sub>2</sub>: 今日は誰も休まずにこうやって全員そろって今日の授業を迎えることができた。先生は非常に嬉しく思います。風邪をひいている人やおなかの調子が悪い人がいるようだけど全員そろって嬉しいです。それでは、今からみんなに発表してもらわうわけですが、今までずっと先生ばかりな、しゃべりまくってきました。今度はみんなの自分の思い、願いをな、腹の底にあるものを全部はき出して欲しいと思います。峠の詩ですが、明るい憂愁を36人全員で見に行きませんか。それでは一番目の発問ですが、特に米騒動の後融和運動が展開されてきたわけですが、そのことについてみんなはどのように感じたか、それと、どうして融和運動では差別は、部落差別はなくならなかったのか、そのことについて意見を聞かせて下さい。誰からでもいいです。ほな、犬伏、奥谷、岡本といこか。

犬伏: 融和運動をしていた人達は、自分自身を守るために融和運動をしていたと思います。部落差別を受けている人達が団結し、協力するのをふせごうとして、自分を上の立場において同情するということで、自分の今の楽な生活をたもちたかったのだと思います。だけど、こんなことでは差別はなくならないと思います。みんなが同じ立場に立って、協力し、行動して差別とたたかわなければならぬと思います。

T<sub>3</sub>: はい、ありがとう。

奥谷: 米騒動のあと融和運動がさかんになったのは、政府が暴動を恐がって、名前だけの融和運動に気を向けさせようとしたからだと思います。融和運動で差別がなくならなかったのは、「部落が差別されるのは、教育がなくて行儀が悪いから」と考えて、どうしてちゃんと教育が受けられないのか、とかの根本的な差別から目をそらしていたからだと思います。

T<sub>4</sub>: はい、ありがとう。はい。

岡本: 融和運動は同情するだけの運動でした。同情だけだったら、部落の人の心のつらさというものがもっとひどくなると思います。同情という言葉だけでまたそこに階級ができ、差別をしているようにしかばくは思えません。

T<sub>5</sub>: はい、ありがとう。えー他にないですか。

新野, 石川, はい。

新野: たんなる同情や説教では、どうしていけないのか、どうして差別されるのかななどを考えなかったから、なくならなかったのだと思います。もっと深く考えて、もっと深く差別に入り込んでいけばよかったのではないかと思います。

T<sub>6</sub>: はい、ありがとう。マイク回してあげてよ。後ろへ。

石川: 差別をなくすということは、融和運動のように同情で、同情で差別をなくすとか、階級をつけた運動で、差別がなくなるというのはあたりまえだと思います。それに言葉で何もかもを終わらせる考え方は、まちがいとおもいます。教育を受けないから差別がなくなる、そういう考えではなく、教育を受けられない子を学校へいかしてあげ

るというところから考えたらいいと思いません。

T : えっと、今6、7人の子がいうてくれたんですけど、同情という言葉、それから、お説教のようなやり方、それから、根本的な問題じゃね、部落差別の根本的な問題にふれないで運動を進めているといったことについて言うてくれたと思うんですが、もうちょっとつっこんだ話できる人おらんでしょうか。たとえば、同情という言葉、同情ってどうゆうふうなことを言うんですか。ちょっと考えてみて下さいね。今言うてくれた人でもいいですよ。説明不足なところがあったら付け加えて下さい。うん。みんなの意見のなかにもあったよ。さーっと発表したけんな。もうちょっとゆっくり考えてみたいんだ。じゃ、誰か。ほな吉岡、圓藤といこか。

吉岡：かわいそうとかいう同情で、部落差別を取りのぞこうとしても部落の人達が表でされなくても、心から部落差別を取りのぞくことはできないと思います。もし表だけ差別がないようでも、心に差別が残っていたら、必ず何かあった時にその本心が出てくると思います。

T : はい。ありがとう。はい。

圓藤：以前は私も融和運動的で、同情心ばかり持っていたんだけど、同情というのは人より一段高いところに上がった見方であり、考え方であると思います。最近、こういう勉強ばかりしているうちに、同情というものがどういうものか分かってきたので、もう少し差別について深く知れたらいいなと思います。

T : はい。吉岡は、口先だけの哀れみとい

たことを言うてくれたと思うんですね。口先だけでな。あたかも同和問題を、部落問題をな、分かっているような言い方をする人がようけいる。けど、心の奥底にあるものはなんかあった時に、いざ目の前にな、部落差別を目の前にした時にその人の本心があからさまにされるといことかな。圓藤は自分の心の中にも同情心があったということですね。他にないですか。うん。どうでしょうか。同情とかそういうのでなくてもいいですよ。大分集約された意見ちゅうかな、今いうてくれた子は、かなり集約されとったなあ。かなりまとまった意見だったな。他に変わった意見はないですか。ないかな。前を向いてよ、先生の目を見なさい。どうですか。ようし、ほなあまり時間もないけんな。次いくわな。ま、あの一みんなの今の意見だったら融和運動というのは絶対反対というふうな考えだと思うんですね。そしてその融和運動、特に米騒動のあとに融和運動が展開されていった、その融和運動の本質を見抜いたわけじゃな。で、西光、阪本、駒井さんの3人を中心に水平社創立大会に向けて運動が始まっていきます。で、大変大正時代という厳しい時代背景とか、それからもちろん冷酷なる差別、それから政府の弾圧とかね、たくさんあったと思うんですね。で、そういったものに負けないでな、最後までいわゆる人間解放運動な、すべての人の自由・平等、すべての人の尊厳を願って解放運動をしていきましたね。そのことについてどう思うか、聞かせて下さいね。どうかな。はい、ほな奥谷。

奥谷：阪本や西光が人間解放運動をやっていた

頃は、今では考えられないくらいに差別きつかったと思います。そんな中で最後には全国水平社をつくり、日本中の部落の犠牲者たちに希望を与えることができたのは、やっぱり西光たちが、自分から差別をなくしていこうといった思いがあったからだと思います。

T<sub>10</sub>：はい、ありがとうございます。はい、他に。一人で寂しいな。はい、ほな吉岡、金岡な。

吉岡：政府はお金で運動をやめるように言ったけど、今まで差別に苦しんできた人の心をお金で買うことはできないと思います。

T<sub>11</sub>：はい、はいどうぞ。

金岡：どんなに苦しいめにあってもどんなに差別や弾圧があっても、3人を中心に自分たちが思っている思いを貫き通したことはすごいことだと思います。いままでなかったこの運動は、差別に苦しんでいる人達に希望を与えたと思います。

T<sub>12</sub>：はい。吉岡がいうてくれたかな、こんなことがあったな、政府が二百万円出すから、水平社を作ることをやめてくれ、そんなことがありましたね。みんなやったらどうですか。どうかな。うん。先生の顔を見なさい。はき出してくださいよ。今までやってきたことをはき出してください。今日という日を最高の日にしませんか。はい、ほな犬伏。

犬伏：この3人の人達が人間解放運動を続けていったのは、部落差別に対する怒りがあったからだと思います。だから政府の役人から二百万円出すから水平社を作るのをやめてくれといわれた時も、迷わず断わったのだと思います。ぼくだったらどっちにするか迷ったと思います。こういう弱い気持ちで

絶えずなくさなければいけないなあと思いました。

T<sub>13</sub>：はい。ありがとうございます。うん。困難に屈しなかったのは、部落差別に対する怒りじゃな、言われのないものに対する怒りがあった、それに支えられてがんばることができた。はい、他に。

はい、漆原。

漆原：もし、阪本さん、西光さん、駒井さんの3人がいなくて水平社運動が作られていなかったら、今こんな同和学習をしていなかったと思うし、今でも部落差別は残っているのに、水平社運動がなかったら、今どのようになっていたのかと思うと、どんなに水平社運動の力が強かったのかが分かりました。

T<sub>14</sub>：うん。なるほどな。もしなかったらね。はい、圓藤。

圓藤：私だったら差別に負けてしまうと思います。えっと、差別に対して反感を持ち運動しているうちに親からも悪人扱いされた阪本、西光さんらは、それでも運動をやめなかったことに対し、初めはそこまでする必要あるんかとか思っていたんですけど、読んでいくにつれて阪本さんらの思いの強さを感じました。

T<sub>15</sub>：はい、ありがとうございます。はい、続いて。午前中の元気はどこへいったかな。大変、大変な困難があったと思うんですね。それに負けなかったね。いろんな困難を乗り越えて、がんばって、がんばって、くずれそうになってもまた乗り越えて、ね。あの、渋染一揆もそうだったですね。そういったがんばり、君たちはどういうふうを感じるですか。思うまままでいいですよ。うん。何も感じ

なかったかな。そんなことはないね。今までずっと一生懸命読んできたものね。はい、佐野。

佐野：差別されるということのつらさをみんなに分かってもらい、差別と闘っていこうということと言いたかったのだと思いました。

T<sub>16</sub>：はい、ありがとう。他に、他にないか、どうだ。人に負けとんのところがうかな、みんな。

どうかな。はい、ほなね、次いくわな。そういったいろんな困難があったわけですね。それに負けないでやっと水平社創立大会までこぎつけてきましたね。どんな気持ちで、どんな思いを持って集まってきたか、そのことについて聞かせて下さい。また、1番2番の発問で言い足りんことがあったら言って下さいね。はいどうですか。岡山からはるばる自転車に乗ってきた人いました。いろんな人が全国から集まってきました。約三千人とも言われています。その人達の気持ち、どんなんやったんだろ。どうだ。おんなじ子が多いね。他の子はどうか。

はい、ほな犬伏、奥谷、岡本、吉岡。

犬伏：この大会に集まってきた人達は、今まで部落差別に対して思うように闘えなかったけど、この水平社がつくられたら、みんな協力し差別と闘えると思って集まったのだと思います。そして、部落差別を自分たちの力でなくそうと思っていたのだと思いました。

T<sub>17</sub>：はい、ありがとう。

奥谷：全国水平社創立大会に集まってきた人達は、みんな上からの同情で差別をなくそうといった融和運動に疑問をもっていたと思います。だから、自分たちで道を切り開こ

うとした水平社に集まってきたんだと思います。

岡本：集まってきた人達は、私達が差別というものをなくしてやるんだ。いままでのつらさをここでぶちやぶってやるんだという思いで来たと思います。みんな平和、平等を求めて必死だったと思います。全国水平社創立大会では、すすり泣きをした人がたくさんいたけど、いつもの喜び感動よりも、何倍にもなっていたと思います。

吉岡：差別の悲しみ、苦しみを訴えて、本当に一人一人が幸せに暮らせる世の中を自分たちの力でつくっていくんだと思って集まって来たんだと思います。

T<sub>18</sub>：はい、よく似た意見、ちょっと違うといった意見はないですか。大会にみんなもおるような気持ちになって欲しいと思いますね。どうですか。はい、永峰。

永峰：一人一人が差別によって死ぬほど苦しめられ、悲しい思いをしてきた人達が、一日も早く解放されることを願う心が水平社創立大会に集まってきたのだと思います。

T<sub>19</sub>：はい、ありがとう。はい他に。ほな、米崎、圓藤。

米崎：差別からの解放や自由の獲得に、差別と闘い、自分たちで差別をなくしていこうとし、自分たちの子どもらにこの苦しみや差別のつらさを味わわせたくないという願いなどがあったからと思います。

T<sub>20</sub>：はい、ありがとう。

圓藤：本当の自由と平等を求めていたんだと思います。二千人から三千人も集まったということから、部落の人の団結の強さ、また、命にかえても差別をなくそうという熱意と勇気もまた感じとれました。

T<sub>21</sub>: はい、ありがとう。うん、熱や光を感じ  
るね。同じ苦しみや悲しみをもって集まっ  
たですね。それから、何が何でもな。差別  
の解消、そういう気持ちをもって集まって  
きた。それから、自分たちの子どもたちに  
は、こんな悲しい差別は絶対させたくない、  
そういう意見がありました。はい、他に。  
じゃ、どんどん進んでしまいますが、その  
創立大会の三千人の中で十四歳の少年、山  
田少年じゃな、が立ち上がってこういうふ  
うに言いました。「今私達は泣いている時  
ではありません。大人も子どももいっせい  
に立ってこの悲しみの原因を打ち破ろう。  
光り輝く新しい世の中にしよう。」と声の  
限り叫びました。この言葉についてみんな  
どなに思うかな。どうでしょうか。ほな、  
奥谷、佐野、犬伏。

奥谷: 山田少年は、今、私達は泣いている時で  
はありませんと言ったけど、その通りだと  
思います。黙っていては、他の人に何も伝  
わりません。やはり、なんらかの行動を起  
こさなければ、絶対差別はなくなりません。  
この研究授業も差別をなくす行動の一つだ  
から、これからももっと真剣に取り組んで  
いきたいです。

佐野: 山田少年の言った言葉に私はとても心を  
うたれました。それは、大人も子どももいっ  
せいに立ってこの悲しみの原因を打ち破ろ  
う。光り輝く世の中にしよう。といった言  
葉です。この言葉の中の光り輝く世の中に  
しようと言ったのは、人としての権利と自  
由がある平等な世の中にするために、闘っ  
ていこうとする気持ちがあるように私は思  
いました。そして、差別に悲しむことのな  
いように私達も、もっと学習し差別と闘っ

ていけるようにしたいと思いました。

犬伏: この山田少年は、泣いていては何もでき  
ない。今自分たちがすることは、みんなで  
協力し、部落差別と闘うことだ。そして、  
部落差別をなくし、誰もが幸せと思える世  
の中にしようということを書いたかったの  
だと思います。そして、ぼくたちはこの言  
葉の通り、協力し、実行していかなければ  
いけないと思います。

T<sub>22</sub>: はい、ありがとう。協力、実行な。奥谷  
は、この研究授業のことについて言ってく  
れたけどみんなはどなに思うですか。はい、  
東条。

東条: 山田少年の言葉を聞いて、私は差別の中  
から逃げていることを知りました。授業中  
もまじめに学習していませんでした。私は  
私の中の差別心から逃げようとしていたの  
です。こんな強い言葉を聞いて、私は自分  
より弱い立場の人をつくっていたのではな  
く、私自身がもっと弱い立場に自分でして  
きました。山田少年の言葉を聞いて、私自  
身が強い心をもちたいです。

T<sub>23</sub>: はい、ちょっと違った意見でしたね。自  
分のことを語ってくれたね。じぶんは逃げ  
ていたんじゃないかなあ。うん。みんなは  
どうですか。はい。

圓藤: 私達とほぼ同じ年なのに、ずい分先輩の  
ような気がして、私達の人間の小ささをす  
ごく思い知らされました。山田少年の言っ  
た新しい世の中とは、上の人間だけではなく  
すべての人が同じように生きられる世界  
のことだと思います。それを話し終えた時  
の山田少年の顔は、希望に満ちあふれてい  
たんじゃないかなあと思いました。

T<sub>24</sub>: はい、ありがとう。上下のないみんなが

水平の立場に立った世界をつくろうということですね。うん。はい、他に。金岡、漆原。

金岡：山田少年の言葉を聞いて私はショックを受けました。私達と同じ年なのに、私にないこんなに強い心を持ち、そして差別解放に向けて立ち上がっているのです。私は、身近にある差別さえなくせません。この山田少年の言葉を心に留め、そして私達の周りにある差別からなくしていきたいです。

T<sub>25</sub>：はい、ありがとう。

漆原：山田少年は、今の私達と同じくらいの年なのに、すごくりっぱだと思います。今、私達は泣いている時ではありませんといった山田少年自身も、本当はすごく泣きたかったのだと思います。でも、涙をこらえて山田少年の精一杯の大きな声は、会場の人達に深い団結の心を伝えたとします。

T<sub>26</sub>：はい、ありがとう。山田少年の生き方に強さをみたという意見が多かったな。ほれに比べて自分の弱さちゅうかな、そういうものをみる、ということでしょうか。はい、ほなね、最後の発問に入ります。なんて時間の過ぎるのは早いことでしょうか。あと10分しかありません。えー今日で何時間かなあ。9時間くらいかけてみんな読んできましたね。せんせいばかりずつとしゃべってきてほんまに悪かったと思うんですね。今、腹の中にあるものな、ぜひこの機会に出して、ほんで何かまた新しいものをね、見つけて欲しいと思うんですね。はい、どうでしょうか。いい足りないこと、それからこれだけは言いたいことではないでしょうか。全部を通してな、何が分かったか、それからこれからどなんしよ

うと思うか、ね。奥谷、石川。

奥谷：「人間に光あれ」を学んで、やっぱり一番大切なのは、自分から差別をなくすという心だと思います。西光らが差別に屈しなかったのは、その思いが何よりも強かったからだと思います。私も、誰かがやってくれるという考えはやめて、自分から人間解放運動に取り組んでいきたいです。

T<sub>27</sub>：はい、ありがとう。

石川：同情だけでは差別はなくなる。全国水平社創立大会のように、なにごとにも積極的に取り組んだり、参加することによって、団結という言葉がより深まって全国に広がるということを学びました。私は、部落差別に対して、その場その場で自分の考えを言っていきたいです。

T<sub>28</sub>：はい、ありがとう。水平社宣言の精神ですね。自主的な秩序ある行動により差別は解消するということですね。はい、他に。はい、岡本、圓藤じゃな。

岡本：ぼくたちはどんな差別にあっても勝てるような人間にならなくてはなりません。ぼくはまだまだ弱いです。この弱い自分を奥深く見つめ、逃げていく自分を逃げていけないように、追いやってきたいです。

T<sub>29</sub>：はい、逃げられないように自分を追いやっていく。はい。

圓藤：この資料を通して何か差別についてとつもない歴史を見てきたように思います。差別は、私達の心のほんの小さな迷いの中からできてくるから、そんなかたく古い考えは、早くなくさないといけないということ学びました。でも、私自身大きな差別に出会ったことがないので、実際に出会った時に立ち向かえるかどうか分かりません。

だからもっと自信のもてる時まで、こういった勉強にはどんどん取り組みたいなと思っています。そして部落差別に出会った時は胸を張って堂々と差別はいけないと、心から言えるようになりたいと思います。

T<sub>30</sub>: はい、ありがとうございます。長坂、佐野、稲富。  
長坂: 部落差別をなくすために、自主的な行動をおこしていければいいと思います。その第一歩として、まず授業中自分の思うことをみんなに伝えればいいと思います。それくらいできなければ、他に何もできないと思うし、それくらいの勇気がいつでももてるようにできればいいと思います。

T<sub>31</sub>: はい、勇気もちたい。佐野。  
佐野: この資料を通して、「人間に光あれ」の題がついたのは、人間には誰でも持っている自由と平等を、差別されてきた仲間にも、その権利を取り返して、自分のものにできるようにするという目標の一つだと思いました。

T<sub>32</sub>: はい、ありがとうございます。はい、稲富。  
稲富: 私は自分以下を求めて、たくさん差別してきました。だから、本当の部落差別を知り、なくしていきたいです。

T<sub>33</sub>: 「人間に光あれ」の光とは、自由と平等を勝ちとる光。それから、私は今まで差別をしてきたということですね。もっと強くなりたいたいということですね。はい、他に。はい、犬伏。

犬伏: この「人間に光あれ」を通して、ぼくは正しいことは正しいといえる世の中にしなければいけないと思いました。そして、部落差別をなくすためにみんなで協力して、行動するというをしなければいけないと思いました。それから、部落差別から逃

げてはいけない、闘わなくては差別はなくなるということを学びました。

T<sub>34</sub>: はい、ありがとうございます。先生の勝手な判断かも知れませんが、逃げないということは訴えることだと聞こえてくるんですが、他の子どもですか。もういいかな、もう2分です。言いたいという子がたくさんおるようですが、どうしても手がゆうこときいてくれないようですね。思い切って、どうですか。顔を上げてくれませんか。はい、ほなね、時間がきたので2Eの授業は終わりたいと思いますね。自分の思ったことをどんどん言えた子もおりますし、まだ自分の胸の中でたまっている子もおるようですね。このあとまだ2年生全体で続くけんなあ。いい足りなかったと思う子はどんどんゆうてくださいね。これで終わったわけではありません。これからまた、新しい勉強が始まるんです。ね。いいですか、終わっていいですね。はい、終わります。

奥谷: 起立、礼、着席。

## 2年全体『人間に光あれ』授業記録

1991年2月1日(金)6時限

指導者 森口健司

T<sub>1</sub>: 前からみんなの顔見よって、いろんなことが今見えるんです。私はこんなに苦しんだのにね。何で言えんのだろうか。毎日の生活の中でこのことが私をこんなに苦しめるのに、何で言えんのだろう。何で下を向きがちになるか、今、心臓の音が聞こえてきそうです。手が、手をね、必死にこう挙げようとする姿をみてね、何でここまで部落差別というのは、仲間を苦しめていくんだろうな、われわれを苦しめていくんだ

ろうな。だからやっぱり、胸張らないかんし、闘わないかんし、徹底的にやらないかんと思います。せつないですよ。部落に生まれた人間にとってね。部落問題を本当に勉強するってことは、これやっぱりせつないですよ。自分のほんとに傷ね、もうほんとに苦しゅうておれん、いとうておれん傷をつつかれるようね、せつないですよ。苦しいですよ。でも、この「人間に光あれ」の中に登場した、西光さんと阪本清一郎さんや駒井さんやそういう人達の生きざまっていうのは、それをほんとに越えて、ほんとに部落を解放していく、取り組みとなっていたわけですね。4月から2年生を中心に、2年生の仲間と共にこの勉強をしてきた。あえて、阿部先生にお願いして、むずかしいのをわかっててお願いして、みんなでやりましょうよって言って、このむずかしい資料に取り組んだわけです。E組のみんなも含めて、この、ね、資料、体育館でやるのはE組が最後になりました。でもこれからが始まりです。始まりです。今から始まりです。みんながほんとに力強くたくましく生きていくね。ほんとに今日もスタートです。この「人間に光あれ」という資料で、発表してもらうわけですが、それぞれのクラスがひのき舞台に立つ公開授業、E組が最後になった締め括りとして、この資料を勉強した意味ってのは自分にとって何だったんだろうか。また、これをじっくりと3学期になって読んできた中で、みんなの中でどんな思いがわきおこってきたか。それぞれが今、感じておること、今、E組の仲間の発言なんか重ねてくれてもいいです。思うこと。今思うこと、今私はこん

な気持ちでおるんやっということがあったら、最初に発表して欲しいと思います。その、ね、手を挙げて次々発表して欲しいと思います。その前に、1メートルぐらい全部前へ寄って下さい。前へ寄って下さい。そのまま前へつめて下さい。どうしても、トイレ行きたい人おるか、どうしても行きたい人は行って下さいね。

それじゃあ、今日授業した「人間に光あれ」という資料、それぞれがこんな気持ちでおるんだ、私はこういう気持ちでおるんだ、そういうものをね、出し合ってもらってそこからまた深めていきたいと思います。どうでしょうか。最初は勇気いるなあ。その第一歩を誰かが切ったらずっとつながっていくと思います。一人か。はい、拳がった。拳がった。下をむいとるだけじゃあ何にも解決せんからね。もうないですか。それじゃあマイク回します。久次米、佐藤、二条、順番にいきます。

久次米：同和問題学習の締め括りとして、「人間に光あれ」を学習した意味は、人の世に熱あれ、人間に光あれの言葉のように、これからの自分たちは今までの同和問題学習で学んできたことを生かして、さらにがんばっていかねばならないんだということだと思いました。

佐藤：ぼくはE組の人とちょっと意見が違っていて、融和運動も別に、あつ、あつ、えっ、してもいいと思います。そして、融和運動で資金してもらったお金で、えらくなって、そしてえらくなってから国を変えていったらいいと思います。

T<sub>2</sub>：今の佐藤の意見ね。今整理しますからね。せいじゃ、二条。

二條：「人間に光あれ」の資料を勉強している時、森口先生が、足を踏まれていた時に痛いと言わなければ、わかってもらえないと言いましたが、それは部落差別もおんなじことで、差別をされている人が辛いことを訴えなければ、みんなに分かってもらえないので、みんなが、そんな部落の人達の気持ちを知ってあげること、必要なのではないかと思います。

T<sub>3</sub>：今の二條にあわせて、最初佐藤がゆうてくれたことで二百万円出してくれる、その二百万円で勉強して、えろうなってから社会を変えていったらいいだろうってことかな。そういうことかな。そんでいいか。

佐藤：はい。

T<sub>4</sub>：はい、そのことについてどうですか。融和運動、はい、井上。あとちょっと考えとってくださいね。

井上：えっと、私達のクラスは、佐藤君のような意見がたくさん多くって、ええと、一部の、やっぱり、融和運動ではだめだって言う子もいるし、やっぱり底まで考えていたら融和運動でも毎日の生活が大切だから、ええ、だから、いろいろな意見が出てきたので、私達のクラスではやっぱり融和運動から、反対の意見もあったけど、融和運動的な考え方も多くありました。

T<sub>5</sub>：融和運動的な考え方も、ね、このお金で、ね、やって、ね、ほしいなって言うか、みんながあこがれていく立場になって行って、国のトップになって行って、そして、解決していけるんじゃないか、っていう意見が今出されたんですけど、どうだろう。はい、中山。

中山：えっと、井上さんたちの話を今聞いたん

だけど、私はちょっと考えが違うんで、言いたいと思います。えっと、この、ええ3人はそんなお金は欲しくなかったと思います。同情で差別はなくて欲しくなくて、やっぱり、ちょっと、ちょっとの間でも、差別されている人達を、ちょっとでも早くなくしたかったから、そんな時間はなかったと思います。

T<sub>6</sub>：今のことについてどうですか。あと、佐藤、井上のことについても、はい。

鈴江：私は、あの、融和運動の、同情の、あの、差別はしてはいけませんということだけでも、あの、なくなったと思うんです。差別は。やっぱり、みんなが一人一人が、えと、部落の人、をばかにしたような考えで、なっていたから、融和運動をしても。だから、融和運動をされていて、これで差別をなくそう思っていた人達が、みんながやっていたら、そしたら、差別解放運動などはなくても差別はなくなっていたと思います。

T<sub>7</sub>：えっと、もう一回、融和運動を、もっとうるふうにしたらなくなるって。

鈴江：融和運動を、口先だけで言っていたけど、もっとなんかでその運動を広く広めて行って、一人一人が差別をなくそうという心を持っていたら、差別はなくなっていくと思います。

T<sub>8</sub>：どうだろう。はい、中山。

中山：だけど、同情では差別はなくなると思いません。

T<sub>9</sub>：はい、そうですね。どうですか。他の人考えとってね。はい、はい新宮。

新宮：えっと、私は融和運動に賛成です。どうしてかと言うと、私も、私も井上さんと佐藤君とかと同じで、やっぱりあの、差別

されるのもいやだけど、やっぱりお金をもらって学歴とか、ほんなんつけて一生懸命がんばって、ほんでやっていて、で、見返してやるってみたいな感じでやってみて、それで融和運動でいいと思います。

T<sub>10</sub>: 見返してやるってことは、差別されとる人間が今度は上に上がっていくんか。逆転するってことか。そういうことか。

新宮: 違う。あう。(笑い)

T<sub>11</sub>: 逆転するってこと。

新宮: ええと、差別されているから、それだから、私は、今差別されとるけど、やりかえす力があるんじゃないかな、ばかにするなよ、みたいな感じでがんばって行って、融和運動を、何ていうか、お金はもらって、あああああ、(笑い)

T<sub>12</sub>: わかった。国がお金を出すからいいわけじゃない。でも、ここでいう融和運動ってのはどういう意味だろうか。もう一回融和運動の意味について誰か説明してください。ここでゆう融和運動ってどういう意味なのか。はい、新宮。

新宮: えっと、わかっ、本当に部落差別のことを分かってない人が、分かったげえなことを言って、ほんで、話を、大勢の人の前で話をする事だと思えます。

T<sub>13</sub>: ちょっと、だれか付け加えて。井上。

井上: えっと、いろいろなことが言えるんだけど、さっき新宮さんが言ったのもあるし、あの米騒動とかのことがあって、それを押さえつけるためにも、融和運動があったと思います。でも、何て言うか、私達が言う融和運動は、やっぱり差別解消も大切だけど、毎日毎日生きていくうえで、ほんまにお金がないとか、生活していくのが辛いと

いうのは、やっぱ、あることだと思います。

融和運動を全面的にするんじゃないし、すごい言いたい足りないことはたくさんあるんだけど、政府を何ていうか、利用するとか、お金だけ出させておいて、ちょっとずるいけど。

T<sub>14</sub>: ちょっと、何かないか。はい、中山。

中山: えっと、私だったら、もし自分が本当に差別をなくしたいと思っていて、この解放を、運動をおこそうとしている時に、このお金で、この解放運動をするのをやめろって言われたら、絶対、お金の受けとらないと思います。

T<sub>15</sub>: はい。ほくね。今先生のことを言うてええかも分からんのじゃけど、二百万でしょ。これが2億だったらね。2億は絶対出さんわな。その百倍、その時つき返したわね。資料の中に出てきとる二百万、これからはもっと部落改善のためにもっとお金をこれから出してくれたらいいんだ、結局、その西光さんが水平社をおこした、差別を根本的になくす、そのためには、国がやっぱり生活を守っていく、生活をきちっと改善していくために、国が、国を動かしていこうとしたわけでしょ。ね。社会を変えていくためにはやっぱり国が動かなんだら、根本的な解決にはならんわけですよ。で、手元の資料をちょっとあけてください。

はい5ページですね。ええ、部落が差別されるのは教育がなくて行儀が悪いからだ、だから、教育を高め、一般民の理解と同情で差別を取り除いていこう、といった考え方で、肝心の生活をどうして成り立たせるかといったということには目をつむり、ただ、部落を差別してはいけませんとお説教

する運動だった、とありますね。根本的な解決、例えば二百万で、ね、西光たちはえらくなっていける。西光や阪本やはある意味で本当に非常に恵まれたところに立てたかも知らん。一部の人間がそういうところに立って、三百万の部落の民衆を救うことができるだろうか。ある程度の金を握らせてくれて、そこで政府の何か重要な役職につけて、ほりゃあ、何人かの部落出身の人間が、そういう形でそういう役職についたとしても、他の者がそのままに放置されておいてね。三百万を本当に救うということにつながっていくだろうか。大多数の者たちが非常に低い生活におかれておいて、経済的にその日食うのが精一杯で、どうにもならん状態で、苦しゅうて苦しゅうておれん状態で、そのまま放置しといて、一部の人間にそういうアメだけをなめさして、お金だけはもらって、そしてその人間だけが仮にその当時のトップに立つような、えろうなったって、ほんとにその人間が、三百万の人間を救済していけるようになるだろうか。どうだろうか。どうですか。はい、竹谷。

竹谷：ぼくは、一部の人間だけが本気で同和問題学習に取り組んでいても、他の人間がいまいな気持ちで同和問題学習に取り組んでいたら、何の意味もないと思います。一部の人間でなく、この地球全体のこととして取り組んでいかなければ、本当に差別はなくなれないと思います。

T<sub>10</sub>：それが、水平社創立大会につながると、全国水平社になったということやな。どうだろうか。いいか。ないか、C組の人。はい、井上。

井上：えっと、私の考えだけど、同情とかで差別をなくすというのはすごい、なんかいいなことなんだけど、せめて、こうなんちゅうかな、上に立ったら絶対力はやっぱおっきいなると思うんです。下より。ほなけん、上いって、ほなけん差別運動をやめるわけじゃないから、上いってときのほうがもしかしたら、差別運動がおっきいできると思う。

T<sub>17</sub>：上にいったら。でも、上に立ってもな、根本的な差別はあるわけだろ。お前は部落の人間って中でな、うまいこと利用されていくって差別の実態が残っていたらどうだろう。なんぼえろうなってもな、部落の人間を忌み嫌う差別の実態が残ったらどうだろう。その一部の人間が闘えるだろうか。

井上：ほしたら、この人やは今度、訴えていけると思う。

T<sub>18</sub>：訴えていけるか。

井上：ちゅうか、この人やだけではなしに、周りの、まだ自分たちが何にもできないと思っている人がいたら、その人達に立ち上がってみろっちゅうことが言えるかもしれない。

T<sub>19</sub>：がんばってついて来いってことかな。われわれががんばった歩みについて来いってことかな。でも、でも、他の生活の実態にそれだけのお金は出えへんよ。二百万以上は出えへんよ。ね。その二百万で救われるのはほんとに少数であるわけ。で、西光たちはこの運動ちゅうのはもっと出せということをこれからこの運動でな、水平社の運動でもっと出して部落全体を改善していき、全国を改善していく運動になっていったんだろう。

井上：ほなら、上になった時、二百万もろうて自分が高い地位になれるかどうか知れんけど、それで、今度は全国の人にお金を出せるように言っていったらいいと思います。

T<sub>20</sub>：はい、中山。

中山：ええと、やっぱりそんなにえらくなっても、差別されている人達と同じような立場に立って、本当に、あの、苦しみとかを考えないと、やっぱり差別はなくならないと思います。

T<sub>21</sub>：どうですか。ほなちょっと、さきいっばい話したいことがあるんで、できたらこれ3時間ぐらいやりたいんですけどね。そういうわけにいかんから。ぼくはね、こういう、このことをどうとらえるか、部落問題はね、みんなの話ですよ。一生懸命勉強してね、一生懸命勉強して、例えば医者になる、医者になる。部落の医者として、部落出身の医者として、ね、その人が本当に部落を解放していくために闘うかといったら、その部落を出て行ってね、出て行って自分も部落の人間でないと、ずっと隠してね。隠して医者を続けとんです。自分が部落であるということをやっと隠して医者をしよる。いつそのことがあばかれ、あばかれせえへんかというふうには、おびえきって、おびえとるといふ現実がある。まあ、その人が弱い、弱いかもわからんけど、それを隠していかなあかんぐらい差別がきつうて、差別がある。その根本的なことをどう解決していくか。そのほんとに部落に生まれたことをじっと隠さないかん、それを言うたらやっぱり差別され、自分のマイナスになっていく。それは差別があるから、その差別があるという根本的なことを、解決してい

くためには部落全体が解放されていくということを一生涯懸命考えていかなんたら、そうはたやすくはない。わずかな人間が、部落のわずかな人間が、えろうなっても解決するもんでないような気がするんだけど、どうじゃろか。そのことについて。はい。

井上：今の時代やけんど知らんけど、ほな先生ね。先生は先生になる資格を一生涯懸命勉強してとって先生になったわけでしょ。ほな、大人になって先生は今いっばい差別をなくすためにしゃべっているでしょ。だから、ほういう考えを私達は持っているんです。

T<sub>22</sub>：でも、そこでな、先生が部落問題の勉強を徹底的にやってきたからこうなってきたわけじゃわな。部落問題がどういふふうで、部落差別がどんなに不合理であって、な、部落問題がどういふ問題であるか、差別の問題がどういふ問題であるかっていうことをしっかりと今まで勉強してきた場面がたくさんあったから、こういうふうにはいろいろな話ができていくわけやな。で、そうした取り組みっていうのは、同情とか越えた学習があるわけじゃわな。してあげるとか、してあげたいとか、そういうもんでないわけじゃわな。自分自身の問題としてみんな考えていきましょうという学習があったわけじゃな。そのなかでやっぱり先生が変わっていった部分ちゅうのがあるわけ。だから、融和的なな、同情的な中でぼくはそんな強くなれなかった、ぼくはへらく、ほんとに教師になっても自分の立場をじっと隠してね。どっかでおびえてね。自分はそういう立場であることをあばかれへんかって、おびえたままずっと生きていく教師であったかもわからん。でも、部落解放運

動がどういうものであるか、部落差別がどういふものであるかということをしかりと学習していったら胸張れるわけ。差別の本質というものがどういふものであるかをしかりとらえていくことができたから、胸張っている話ができいくわけ。いろんなところでもう負けせんわけ。引かせんわけ。訴えていくことができるわけ。で、まあ、そのお金を出してもってね。そういうこう、差別されてなかなかはい上がれん実態があったら、やっぱりそれを改善していくような。だから国がお金を出していく、国が生活を保障していくちゅうのは絶対いけるわけじゃわな。それはやっぱり部落解放運動の中で今、ずっとなされてきた、ずっと10年、20年なされてきた。ここでいう融和運動ちゅうのは、もう政府の言いなりになりなさいってことやな。融和的な。だからそれに抵抗していったわけじゃな。もつとまあ、いろんな深い意味があるんだけどな。どうか。いよることわかるか。

井上：えっと、私のクラスは、私はやけど私はこの中の資料の融和運動ではなしに、自分らの融和運動っていうのをちょっと美化しとると思うんですよ。ほなけん、でも高い地位になったけんゆうてぜんぜんわるくなるわけじゃないでしょ。ほなけん、みんなが慕っている中でそれを引っぱっていく人がおってもいいと思うんですよ。

T<sub>23</sub>：リーダーは絶対いけるわけじゃな。でもそれは一部の人間がとび出るのではなくて、やっぱり全体の問題としてこうとらえていって、全体でがんばっていくってこともいる。どうかいな。あとちょっと付け加えることはないかいな。どうや。はい。水口。

水口：一人の人だけがとび出るとかっていうんじゃないくて、運動とかで得たお金を生かして、みんなでよくなろうという考え方だったら、もう少しそのお金をもらっても考え方が変わってくるんじゃないかなあって思います。

T<sub>24</sub>：どうですか。一人じゃなくて、みんな。もう一つ。一人の人間の力ってほんとに弱い。先生やものすごい弱い。ようけの人が支えてくれたから、励ましてくれるから、今でもいろんな研究会に行つてね、いろんな先生方と出会う。そん中でがんばる。ゆうべやって実は大学の友人から、晩11時頃寝とったんやけどね、電話がかかってくる。それは小学校の同和教育推進教員の人です。そん中で今ちょっと大変なことがあって、電話がかかってくる。実は明日阿部先生が授業して、阿部先生知つとる人やからね。ああ、ええことやな、がんばればよって話をしてくれる。ああ、がんばらなあかんって気持ちになる。やっぱり数少ないってことは、ね、一部でやるってことは弱い。弱い。ね。同和問題をほんとに広げていくってことは必要なわけ。だから、一つのクラスでやるよりも学年全体でやる、だんだん広がっていく。付け加えて、どうかな。ないですか。はい。それじゃあ松本。

松本：ほくも一人ではいけないと思います。団結して、団結してようやくできるものだと思います。

T<sub>25</sub>：どうですか。はいほれじゃあ、長崎。

長崎：一人の力では絶対、部落差別のことは勉強しないと思います。団結して初めて部落のことを勉強したら、本当に部落のことが深く分かるようになると思います。

T<sub>26</sub>: はい, じゃ, 長尾。

長尾: あ, ぼくも心の支えはやっぱりいると思います。やっぱり, 何の運動をおこしても人は堂々と運動をしたり, 心強くできると思います。

T<sub>27</sub>: 水平社の創立大会に集まってくる。その中でね, 昨日うちのクラスでノーバンっていうたら久米がわろうてわろうてしたんですけど, このノーバンの自転車がね, あの岡山から行ったやゆう, 来たという話をしたんですけどね, 全国から三千の仲間が集まってくる。それは, その集まって来た三千の人の背後にはまた何百, 何千という仲間がおるわけですね。しかしほんとにあれは, 一つの水平社, 全国水平社。全国の仲間が団結して, その悲しみや苦しみを訴えていく, ことによってその団結が強くなっていく。一部の人間, これは一つの方法かも分からんですけど, ね, 六千部落三百万という仲間がですね。ほんとにそのそれぞれの願いや思いっていうものをね, 感じ取りながらね, 立ち上がっていくことによってね, 闘っていくことによってね。ほんとに変わっていく。これがこの資料だと思うんですがね。あとどうですかね。資料について。はい, ほれじゃあ, もう一つ聞きたいことがあるんでね。ちょっと考えて下さい。学年全体で取り組んできたということですね。今日が最後ということですよ。学年全体で同和問題について勉強してきたってこと, その中で自分の中にこういう思いっていうものができてきたんだ。また今回は2年生では最後の授業になるかもしれないけど, みんなにこういうことが言いたいんやあったらいうて欲しいし, また学年全体

で取り組んできた中で, こんなことを思うとんやっていう, ね。みんなの思いってゆうものを聞かせて欲しいと思います。それでまた深めていきたいと思います。どんどん手を挙げていきたいと思います。手を挙げて下さいね。どんどん手を挙げて下さい。

それじゃあ, 中羽と佐藤と村山と竹谷と順番にいこう。はい, 中羽。

中羽: 今の世の中は, 民主主義とか言っているけど, まだまだ民主主義とは言えないのではないか。人間は自由に生きたり, 自分の意見が言えて人間誰もが幸せであることだと思います。でも, そうかということ, 今の世の中はまだまだ差別されて苦しんでいる人がいるのに, 本当に幸せで平和な世の中なのか。今2年という学年で, 2年という学年でその本当の道筋を作っていきたいです。

T<sub>28</sub>: 佐藤。

佐藤: ぼくは2年生全体でやって, C組には出てこなかった意見がようけ出てきたので, やっぱり, いっぱいいるとみんないろいろ違った意見が出てくるので, とても勉強になったと思います。

T<sub>29</sub>: 村山。

村山: えっと, 学年全体で公開授業をすると, いろいろな意見が出てくるのでとてもいいと思います。そして自分が公開授業とかしているとき, 内容が深まった意見ができにくかったと思います。だから, これからは, もっと内容のある意見を言っていきたいと思います。

T<sub>30</sub>: 竹谷。

竹谷: 一人でもおろそかにしない。同和問題はみんなで学んでいかなければいけない。そ

して一人でも多くの人がいた方が、何かと行動がしやすいし、これだけ多くの意見が聞け、同和問題解決へとつながっていくと思う。そして、学年全体で同和問題を学習することによって、自分の意見が間違っていないか、もし間違っていれば他の人はその間違いに気づき、それに対する答えを教えてくれると思う。だから、ぼくは絶対に同和問題学習を続けるべきだと思います。

T<sub>31</sub>: あとちょっとつなげてください。いろいろ出た中でね、ポイントを押さえたいと思います。はい、手を挙げて。一人。一人。中山。長崎。それじゃあ、順番でね。ちょっとこらえてよ、順番でいくけんね。それじゃあ、久保、長崎、中山、佐々木、陰山、誰、新宮、水口、順番でいくけんね。はい。

久保: ぼくは同和問題に取り組んできて、団結の強さを感じてきました。一人ではできないことでも、何人もが意見を言ってくれるから、自分の思いが本当に言えると思います。もし差別しているのを見て、みんなでそのまま見過ごしていたら、何も変わってないと思います。涙を見て同情するのではなく、涙を流させないような生き方にしていかなければならないと思います。

T<sub>32</sub>: はい、長崎やったかな。長崎。

長崎: 4月から同和問題学習を学んできた中で、私は団結という言葉をしっかり身につけることができました。これからも、この言葉を大切に、同和問題学習をもっともっと深く学んでいきたいです。

T<sub>33</sub>: じゃ、続けて言って下さい。はい。

中山: えっと、最後の最後まで同和問題に取り組んでくれたのは、今私達が本当に取り組んで解決しなければいけないのは、この同

和問題だからです。私達の仲間にも同和問題で悩み、苦しんでいる人がいるから、学年全体で取り組んでくれたんだと思います。

T<sub>34</sub>: 佐々木。

佐々木: 一人一人の思っていることを学年全体の中で、間違っていることは間違っていると、自分の間違った意見を直していくために学年全体で取り組んできたと思います。今は、学年全体で取り組んでいることを、学校に広げるために2年生が中心になってがんばるべきだと思います。

T<sub>35</sub>: 学校全体に広げるためにがんばっていく。

うれいなあ。はい、じゃあ、井上。

井上: えっと、最初のほうはきれいごとっていうか、なんかみんな、感じたこととか言うの少なかったけど、このごろ最近になってきて、ほんまに自分の言いたいことがちょっとずつでも言えるようになって、それでもちょっと言い合いみたいになったかもしれないけど、でもほんだけ自分の気持ちちゅんが出とんじゃけん、やっぱ、やってきたことはプラスになってると思うんです。でも、やっぱり、どうしても、差別心がなくなったわけとか、ぜんぜんほんなんじゃないから、もっとこんなことやってみたいなって思っています。

T<sub>36</sub>: ありがとう。じゃ、後ろ。

蔭本: えっと、私達はまだきちっと、部落がどんなかってのは分かってないと思います。でも、今現在部落差別というのは、少しずつでもなくなっていると思います。

T<sub>37</sub>: はい。

水口: たくさんの人の中で自分の意見を言うというのは、すごく緊張することだけど、それだけたくさんの人に自分の意見を聞いて

もらえるし、たくさんの方の意見も聞けるし、すごく刺激になったりすると思います。最初はみんなちょっと、きれいごとみたいなことばかり言ってたけど、だんだん自分の本当の気持ちとか言えてくるようになって、やっぱり、みんなで一つのことを考えていくというのは、大切なことだと思います。

T<sub>38</sub>: はい、新宮。

新宮: ええと私は、最初のほうっっちゃうか、最初のほうも中学校に入ってから、小学校の時もずっと作り言葉や、で言ってきたけど、今思ってみたら、ほんなこととする自体が差別やったんやなあってとか思って、なんか勉強してきよる間に、なんか、そなに思ってきました。

T<sub>39</sub>: はい、ありがとう。どうですか。はい、はい。先ほな、圓藤、鈴江といこか。マイクちょっと回してあげて。いいわ、ほな、圓藤。

圓藤: クラスという小さな枠の中で、差別がなくなったとしても、違う、また違うクラスの子から同じように差別を受けたら、あってはならないことだけど、また以前と同じようになってしまうので、こんな学年全体で差別という問題に取り組んで、それを学校全体とか、ずっと広げていったら、本当に差別はなくなると思いました。

T<sub>40</sub>: はい、じゃ、鈴江に回して。

鈴江: えっと、私はあの、部落問題学習をしてきていろんな意見を聞いたし、私自身もいろんな自分の意見を出すことができたし、心に残りました。そして、もうこの世の中にも差別がなくなって、もう部落問題学習も、なくなるぐらい平和になったらいいな

と思いました。

井上: わっせていたことなんですけど、この公開授業をしていて、いつもこういう部落問題というのは本だけの中のことだと思っていたんですけど、ほんまに悲しんでいる人がおるってということもしたし、その人の声を聞くことができて、本音を言うことができたし、このことがなかったらもしかして私も、いけないことだと思っていても、本物の話ができていたかどうかわからなかったし、やっぱりこの点では、なんていうかな、ただの道徳というより、自分たちで、自分たちのものだって感じがして、よかったです。

T<sub>41</sub>: えっとね、ちょっと時間ないですからね。

体育館でやることを全部ひっくるめてね、ここが言いたい、こういうことを分かって欲しい、っていうことね。それとあわせて、一年の取り組みの中でね、私の中にあった、ぼくの中にあったこういう部分が何となく変わってきたな、ああ、こういうことが本当にこの勉強の意味だったんやな。でも、こんな気持ちでおるんや。ほんとこの気持ちが分かりあいたいんや。そしてね、せこうにならんでも、ね、思うたことがもっともって言える。ああ今日もやってよかったなっちゃうことが実感としてね。ほんまみんなでがんばっていきこうやって気持ちが変わりおこってきてね。つらい気持ちでおる子がね、ほんまおらんようになる。そういう、ものを目指してきたんやけど。どうですか。もうあとわずかな時間やけど。ね、こんな部分私変わった。勉強してきてよかったっていう部分があったら、最後何人か、語ってくれたら、話してくれたら、聞かせ

てくれたらと思います。はい、挙がったな。

ほいじゃあ、順番なあ。久米いって、中山いって、井上いって、マイク回して、はいほな。

吉川：2年になってよく学習するまでになるまでは、あまり部落とか差別とかに興味はなかったけど、自分で学習して同和の資料を読んで、それぞれの思いを語り合うようになって、少しは差別されている人の気持ちがあったつもりです。少なくとも中一までよりはよく分かっています。それともう一つ分かったことは、部落の人のがんばりです。差別をなくそうと必死で昔から努力してきたんだということがよく分かりました。

T<sub>42</sub>：久米。

久米：私はいろいろ資料を学習してきているけど、感想、自分の思っていることを書いてきました。でも今日先生に、差別されている部落の人の気持ちは、差別を受けてきている人でないと分かりにくいと言われて、私は今までのことを振り返ってみました。私は部落差別で涙を流している人をみると、どうして涙が出るのだろう。それほどつらいこととは思わないのに、とか、その人が流している涙の意味を分かろうとはしませんでした。うわべだけで付き合っただけ、あの人は差別にあったんだなあとか、かわいそうとか、同情の目でその人を見ていたように思います。私は絶対差別はしていないと思ったけど、いつのまにか私はその人に対して差別をしていました。私も差別者の一人になっていたなんて思いもしませんでした。すごくいやです。こんな自分を直したいです。すぐにも直らないかもしれないけ

ど、直す努力をしたいです。

T<sub>43</sub>：今のね。久米の発言について、後でまたちょっと何人か。ええ、思いが聞きたいです。中山言ってください。中山。ちょっと考えてみてね。

中山：えっと、やっぱり同和問題学習に興味を持ち、今まで知らなかった現実や事実を勉強してきたことです。同和問題を学習して、今までと考え方が随分違いました。

T<sub>44</sub>：どういうことが変わった。

中山：ほなけん、知らなかったこととか、を、資料を使ってみんなで勉強できた。

井上：えっと、私とおんなじ意見の子がやっぱりC組にたくさんおると思うんですけど、えっと、小学校の時とかだったら、私はできたら感想文の時とかだったら、私は正しい答え、正しい答えっていうのを求めて書こうとしていたけど、今やったら、今日やったら融和運動はいけないうちうて、資料に書いて。ほなけど、ほんまにどうなんかにいうことをみんなで考えていけたり、ほなけん、授業ではあかなくて言っても、自分ではちょっとええと思うとか、ほんまの自分が言えるようになって、ほなけんやっぱり、ほんだけまじめに取り組みようっていうか、本気でぶつかっていけようっていうことかもしれんから、ちょっとほういうことは、自分で成長したんかなって思います。

T<sub>45</sub>：はい、今の井上が言った意見、それと久米の意見、中山の意見に付け加えたり、また、ぼくはこう思う、私はこう思う、という部分。あと3分で終わらなうこられるけんね。3分しつかり言うてください。一人。はい、A組の人どうですか。消化不良で終

わるなよ。腹の底にあるもん出さないかん  
で。ほんまに。はい、じゃ、長崎、次、ほ  
な松田。はい、長崎。

長崎：4月から同和問題を学習してきた中で、  
ええと、私は一番よかったと思います。た  
くさんの仲間と部落問題を学べて、心の中  
から本当の自分の思っていることを訴えた  
り、話したりできてうれしかったです。

T<sub>46</sub>：はい、それじゃあ、松田。

松田：私は今まで部落問題とか学んできた時、  
何でまたこんなことをするんだろうかと思っ  
ていました。でも学年全体で取り組んでき  
た、取り組んできて、私はたくさんのこと  
を知り、考えが変わってきました。今まで  
たくさん学んできたけど、私はまだまだ世  
の中、社会のことを知りません。だから私  
はもっと差別のことについて勉強してい  
きたいです。

T<sub>47</sub>：はい、はい、胸はれよ、胸はれよ、いい  
か。はい、佐藤。

佐藤：2年に上がって部落問題に真剣に取り組  
むようになって、差別はほんとになくした  
いと思いました。道徳とか、学活とかの学  
習だけでなく、美術の時間にも話し合いを  
してこれからは差別している人に対して、  
差別がどういうものであるかを話してやめ  
させたいです。

T<sub>48</sub>：はい、腹の中にあるものをねえ、さっき  
からため息ばかりつきおらんと言ってく  
ださい。ほんまに。はい、どうですか、あ  
と。あと1分で終わらなおこられる。一人。  
最後です。今挙がった人、全員ねえ。言う  
ことを許可します。今挙げない人はだめ  
です。もうないですか。はい、挙がった。順  
番でいきます。はい、挙がったねえ。はい、

ようけ挙がったなあ。これで、この時点で  
終わります。順番にいけます。圓藤、圓藤、  
吉田、市川、大川、竹谷、坂田、ちょっと  
順番にいこな。はい。

圓藤：えっと、一年間こういう取り組みをして  
きて、今までは、こう一人だけで、こう、  
何とかしてなくしていかなければいけない  
とか、考えたりしていたんですけど、こう、  
取り組んできた中で、団結の強さっていう  
んですか、そういうのが分かってきたよう  
な気がします。こう、あの、遠くに離れて  
いても、これだけ一年間2年生全体で、こ  
う学習してきたわけだから、部落差別に  
対する思いは、2年生全体同じものだと思  
うんです。だからもし、差別に自分が負け  
そうになった時も、時でも、こう、こんな  
ふうやってきた授業を思い出したら、励  
みになるんじゃないかなと思ったりして  
います。

T<sub>49</sub>：今の圓藤の意見、はい、吉田。

吉田：やっぱり、圓藤さんが言ってたように、  
えっと、私もよく一人でなんか、こう、悩  
むんですけど、あの、私だけじゃなくてね、  
ええ、2年生っていう、こう、何ていうて  
分からんけど、周りに仲間がおって、ほん  
で一人だけで部落という問題を解決しよう  
と思っても、こんなちっぽけちゅうたらな  
んやけど、そういう力ではなくならんと思  
います。んん、だから、こういう公開授業  
をやってきて、それで自分の意見をどんど  
ん言って、それで周りの人の意見もどんど  
ん聞き入れて、それで人の意見と自分の意  
見をかみ合わせて、毎日の授業に向かって  
いこうっちゅう気合いみたいななんが入っ  
てきて、今のE組の公開授業みたいに、ど

んどん意見が言えてきたなと思います。

T<sub>50</sub>: はい、市川。

市川: 私も井上さんと同じで、いいことばかり探して前は書いていました。それが、今では悪いことも堂々と書けるようになったので、今度はみんなの前で言えるようになりたいです。

T<sub>51</sub>: 大川。

大川: 2年生になって公開授業とかを見たり聞いたりしているうちに、自分の考えとかもいろいろ変わってきて同和問題に真剣に取り組んでこれたと思います。これからも、いろいろな資料を読んでいきたいと思います。

T<sub>52</sub>: はい、坂田。

坂田: この一年間の取り組みの中で、ぼくは変わりました。同和問題の大切さと自分から真剣になってやるという気持ち、それと団結ということの大切さを知りました。そして、ぼくたちが今までの人達の勇気と自信を受け継ぎ、部落差別に立ち向かっていかなければならないということ学びました。

T<sub>53</sub>: 竹谷、あとであてるけんな。

三木: ちょっとした言葉でも、相手の心をひどく傷つけることがあるので、人の悪口なんかは言わないようにしていこうと思います。みんなが一つになってがんばっていけるようにするにはいけないと思います。また、部落差別という問題に取り組んでいて分かったことは、差別をしている人は自分の弱い心に負けているんだなと思いました。

近藤大: ぼくはこの一年間同和学習に取り組んでいて思ったことは、自分でも分からないところで差別していたり、そんなところがあるとと思うので、これからはそんな差別に

早く気がついて、それをしないように努力していきたいと思いました。

T<sub>54</sub>: はい、漆原。

漆原: 今まで差別に対する学習で、こんなに学年単位でするのは初めてなので、クラスのみんなだけでなく、もっとたくさんの人の意見が聞けたことはよかったです。

T<sub>55</sub>: はい。

近藤章: ぼくは一年間同和問題を学んできて、たくさんの人が昔は努力して運動などをおこしても、まだ根強く、根強く差別が残っていると思いました。しかし、今は昔の人があれだけ力してもまだ差別は残っているので、簡単には差別はなくならないと思いました。だからこれからももっともずっと同和問題を学んで、差別をなくしていきたいと思います。

藤田: 今ぼくたちが平和に生活しているのも、昔の人々ができる限り差別をなくしてくれたからだと思います。だからぼくたちもその考えを受け継いで、完全にこの世から差別という言葉までも忘れるように平和な世の中になって欲しいです。

平野: 一年間同和学習を学んできて思ったことは、部落の人が差別をやめらすということは、自分に「人間なんだ」という自信をつけることが大切なことだと思いました。あたりまえだけど、部落差別はとても悪いことだと思います。その差別が今でも末永く芽を出し続けています。けれど人間全体が人間の原点を考えれば、きっと部落差別はなくなると思いました。

久次米: 一年間の、

T<sub>56</sub>: マイクを近づける。

久次米: 一年間の取り組みの中で自分自身が変

わったことは、このことはしてはいけない、  
してはよい、という判断ができるようになった  
ことです。それから、同和問題について  
うよく分かったことは、いろいろな差別が、  
まだ今になって残っていることです。ぼく  
は差別や、ちゅうちゅう（笑い）、学習会  
など参加して、差別をなくしていきたいで  
す。

T<sub>57</sub>：ほな、竹谷。

竹谷：ぼくは人の気持ちに分かってあげる、あ  
げられる、そして自分の問題として部落差  
別にもっともっと取り組んでいきたいと思  
います。

T<sub>58</sub>：時間がきてしまったんですけども、一言  
のお、ほんまに胸張ってね。腹の底からね。  
井上が言うたように、腹にあるものが出し  
合える、ほのお、ま、学習会のことも言う  
てくれたんですけど、案内もろたら隠さな  
いかんという、その、何でそういうくやし  
い思いをするのか、せつない思いをするか。  
その思っているものをどうしたらとれる  
か。どうしたらその悲しみというのがなく  
なっていくか。そういうものをね。徹底的  
に勉強して行ってね。ほんと、みなが胸張っ  
てね、今日はほんまに学校来てよかったっ  
ていう学校にしたいし、で、この組み  
がね。みんながほんと5年先、10年先、20  
年先、我々はずっとつながっていくんです  
よ。板中で学んだ仲間として、ずっとつな  
がっていくんですよ。ね。10年たったら仁  
木先生は相当年いっとなるでしょうけどね。  
ずっとつながっていくんですよ。もう、永  
遠とつながっていくんですよ。ほんとにこ  
ういう話、いつまでもできていく関係って  
のは永遠、永遠なんですよ。この営みって

いうのをね。もっともっとう、みんなの  
大きい力を与えていくね、取り組みにして  
いくためにもね、もっともっがんばって  
いきたいと思います。今日は、ほんとみん  
ないろんな意見を出してくれて、ありがと  
うという気持ちです。以上で終わります。  
じゃあ、はい、終わり。

奥谷：起立，礼，着席。

【資料】人間に光あれ

土 方 鉄

三人の青年たち

阪本清一郎、西光万吉（清原一隆）、駒井喜作の三人は、奈良県南葛城郡掖上村柏原（現在御所市柏原）という部落に生まれ、いっしょに、そだちました。阪本は、ニカワ製造の家業を手伝っていましたし、西光は、部落の寺西光寺の住職の子どもで、駒井は桐材の売り買いを業としておりました。

三人は仲がよく、しかも進歩的な考えをもった青年たちで、青年共和国という青年の組織をつくっていました。この“共和国”という名称は、フランスなどの共和政治から民主主義の精神をまなびとってつけたものです。

この部落には、“五万日の日のべ”という有名な話が伝えられています。

一八七二（明治四）年に、太政官布告第六十一号で、政府は、「穢多・非人の呼称を廃止する」という“解放令”を出しました。このしらせに村人とともに喜んでいました庄屋清兵衛のところへ、ふきん数カ村の大庄屋である、となり村の庄屋から、使いの者がきました。なにごとかと、でかけていくと、大庄屋は、「実は清兵衛、おとといの“おふれ”は、五万日の日のべになった」と、いったのです。

五万日といえば、百四十年近くにもなります。部落の者が増長しては困るというので、この大庄屋は、うそをいったのでした。

阪本は、この庄屋清兵衛の孫ですから、三人は、この人をバカにした話を子どものころから聞かされてそだったわけです。そうした話のなかで、学校問題などが三人の心にやきついてはなれないものでした。

それは、こういう話です。

明治二十年代に、政府は小学校の統合令というものをだしました。原則として一つの村に一つの小学校ということにしたわけです。掖上村は八つの大字にわかれ、それぞれに分校をもっていました。この統合令で一つにしなければなりません。ところが、村民たちは七つの大字だけで新しい学校をつくり、柏原部落だけは分校のままでおこうとしたのです。部落の子どもといっしょに勉強させるのは、けがわらしいという考えなのです。柏原部落の人たちは、こういう差別あつかいに腹をたて、入学式の日には、子どもをつれて新しい学校へむかいました。

た。すると、どうでしょう。校門はかたくとぎざれていて、部落の人たちが校庭にはいるのさえこぼむりさまです。人びとは部落へとってかえし、西光寺にあつまりました。伝えきいた人たちもどんでんあつまってきました。いつのまにか、人びとは、手に竹槍やぼうなどをにぎりしめています。女の人や、子どもまでをふくめて、部落じゅうの人があつまってきました。

「役場へいって抗議しよう」

「こんなめにあわされて、だまってひきさがることではできない」

「だまっていたら、おれたちの子どもはいつまでも泣いてくらさなければならぬ」

「役場へいこう！村長と交渉しよう」

柏原部落の人びとは、列をくんで村役場へ抗議におもむきました。

一方、部落の代表は、県知事に陳情書をもって訴えにきました。

村役場には、村長のほかに、学校合併反対派の人たちもおりましたが、「柏原は遠いので子どもがかわいそうだと思ったからだ」と、親切そうなことをいってごまかそうとします。「それならそれで、なぜ相談をしてくれなかったのか」と、柏原部落の人たちはつめよりました。どのように差別したくとも、それをこぼむ正当な理由はみつかりません。それに、子どもまでが竹槍をもっている怒りの激しさをみては、むり押しをとおすことができません。ついに、低学年の一・二年生だけはもとの分校であつかい、三年生以上の本校への通学をみとめたのでした。

また氏神のお祭りから、のけ者にされていたので、柏原部落の人たちは集団で、供物をもって祭礼のなかへわりこんでいきました。

「おれたちも氏子だ、神様が人間を差別するはずがない」という主張に反対のしようがなかったのです。

また同じようにして共同墓地への埋葬もみとめさせたのでした。

こうして人間は平等であるという、権利にめざめた柏原部落の人たちは、うばわれていた権利をつぎつぎにとりかえしていったのでした。

三人の青年は、このように平等の権利をもとめ、団結してたたかう伝統のある部落にそだったのです。しかし、かれがら小学校（本校）へ進学したとき、経験しなければ

ばならなかったのは、やはりことごとくける差別待遇だったのです。

「おまえは、エツタだろう」

ところどころにうただけでなく、なぐったりけったりするのです。先生も、部落の子どもだけ、べつにならべさせるのです。だから身長順にならんでいてとちゅうからまたたかくなります。そこからが部落の子どもだということがいっぺんにわかってしまうのです。

阪本らが中学校へ進学していったときも、それはたいしてかわりませんでした。

阪本は、小学校をおえると、奈良市内の親類の家に下宿し、商業学校（現在の商業高校）へ進学しました。その学校には、部落出身の生徒が、ほかにもふたりいましたが、ふたりは小さくなって、いつもいじめられてばかりいたのです。阪本もまた、ことごとに差別され、いじめられました。もっともかれは、からだも大きく力も強かったので、ひとり対ひとりのばあいはけっしてまけないのですが、大勢でこられると、どう抵抗してもまけてしまいます。それは、とてもくやしいことでした。それに、いくら勉強しても、部落の人間はどうせ社会には認められないのだという考えもあって、それでは実力でいこうと思いつき、腕力をふるってそれにむくいることにしました。かれがこのような実力主義にてしはじめると、これまでいばっていた生徒たちは、逆に阪本におべっかをつかうようになりました。それからの阪本は、いちやく生徒中の腕白大将になったのです。そして、たいへん生徒の人権を無視する教師がいたので、その教師をボイコットするストをやって、ついに学校を退学させられてしまいました。

ところが、西光は畝傍中学校（現在の高校）に通学していたのですが、たびかさなる差別にたえきれず、退学し、近所のものいらない京都の平安中学校（平安高校）に転校してしまいました。

しかし、ふたりは、こういう経験の中で、部落の人間は団結しなければならぬということを深く胸にきざみつけたのでした。

やがて、阪本は家業のニカワ製造を手伝いはじめましたが、商売の用事で、たびたび東京へでていくことがありました。そのころ、西光も東京にでて太平洋画塾にはいって絵の勉強をしていました。ふたりは平民新聞や、中江兆民の『一年有半』という本、ロシア文学、あるいは

は社会主義の本などを読みあさりました。

ふたりがうまれた柏原部落には、自由民権運動に参加して活躍した人がいたのです。それは、異数馬、阪本清俊、東清七、松井庄五郎らで自由党の大井憲太郎らにまじって運動していたのです。とくに、巽は、時の大隈重信外相の条約改正に反対し、大隈に爆弾を投げつけ投獄されています。これらの人たちの影響を、阪本らがうけたのはいうまでもありません。

かれらは、青年共和国をさらに発展させて、同人組織の燕会を結成しました。「部落の差別をなくするにはどうすればよいのか」、若いものたちの心をとらえていたのはそのことだったのです。

そのころの部落の人たちは、とてもひどい生活をしていました。部落の人たちには田畑がないうえに、大きな工場などは差別してやとってくれなかったのです。柏原部落も、農村地帯にあって、広々とした田畑にかこまれていながら、田畑をもっている人はいませんでした。だから男は、荷車ひき、農業日雇い、土方などをし、女の人はずら草履などをあんで売るなどして、ほそぼそとくらしていました。だから部落の人の生活はみじめでした。たとえば、ごはんの人ったままの釜や、フトンまで質屋に入れるというありさまなのです。子どもまで働かせて、それでやっと、米を一升買うの金を手にいれるというありさまなのです。

こういう状態にたいして、一九一〇年代、岡山の三好伊平次、和歌山の岡本弥などという人たちが、それをよくしようとしてたちあがりました。

しかし、その多くは、「部落が差別されるのは、教育がなくて行儀が悪いからである。だから、教育を高め、一般民の理解と同情で差別をとり除いていこう」といった考え方で、かんじんの生活をどうしてなりたさせるかといったことに目をつむり、ただ「部落を差別してはいけません」とお説教する運動だったのです。これを融和運動といいます。阪本も最初は、同じ部落の松井庄五郎らの大和同志会に入って、この運動に加わっていました。

とくに、米騒動のあったあと、こういった融和団体は官民合同で、ぞくぞくとつくられはじめました。それというのも、生活が苦しい部落の人たちが、この米騒動に参加したものですから、政府はアメをあたえて、おとなしくさせようとしたのです。

また、当時の社会の動きといいますと、ソヴィエトに

世界ではじめて働く人たちの国がつくられたことと、米騒動という民衆自身が行動する画期的な大事件を経験したところから、労働者や農民がみじめな生活から解放されようと、ストライキや小作争議を嵐のようにまきおこしていたのです。

阪本らは、燕会の活動として、村政の民主化をはかってたたい、〈生産者から消費者へ〉のスローガンで、消費組合の運動をやりました。そういった運動をつづけるうち、当時の民衆のうごきや、社会主義の思想にふれたこともあって、だんだん融和運動のやり方ではいけないのではないかと、考えるようになりました。

燕会のおもだった人たちは、賀川豊彦、大杉栄、堺利彦、山川均などという社会主義をたずねていき、話をきいたり、教えをうけたりしました。驚いたことに、これらの人たちには、全く差別的態度はなく、安心して心から話しあえたのでした。

かれらが、社会主義者と交わりをもつようになったので、いつのまにか、かれらにも警察の尾行がつくようになりしました。当時の警察は社会主義者の行動を監視して、なにか事件があると逮捕したものです。ところが、阪本や駒井の家のおとうさんたちは、自分の子どもをまるで悪人のように考えて、子どもたちといい争いました。ふたりはとうとう家を出て村から離れた畑の中の一軒家を借りて、そこに縄ない機をすえて働きながら、融和運動をこえる新しい運動をおこす準備をしていました。西光は寺からその一軒家へかよっておりましたが、もちろん寺にも警察がきましたので、檀家の人たちが西光の父をせめました。しかし、西光の父は、西光らのやっていることを理解していたので子どもをかばいつづけました。西光が一軒家へ出勤しようすると、父がかれを呼びとめて、

「運動は進んでいるか」  
とたずねました。西光が、  
「うまく進んでいます」  
と答えると、

「それはよい、やるだけやれ。しかし、しばらく村を離れて京（京都）か大阪へ行け、そこで運動を続けなさい。金は少しづつでも、できるかぎり送ってやる。とにかくきょうは、これだけもってゆけ」  
と金をさし出しました。西光は、父が檀家の人びとにせめられながら、きょうまで自分をかばってくれていたこ

とをよく知っていましたので、父の思いやりをありがたく思い、身のまわりの物を包んだ風呂敷包み一つさげて寺を出ました。西光は、阪本らと相談して京都へいくことにしたのです。

ちょうど、このころ、各地の部落の青年たちの間にも、融和運動にあきたらず、新しい解放運動をおこそうとする動きが強くなってきました。そして、それらの人びとは互いに連絡をつけはじめたのです。しかも「部落の完全解放は、われら自身が行動する自主的な運動でなければならぬ」ということで意見が一致しました。

また、早稲田大学の先生をしていた佐野学という社会主義者が、『特殊部落解放論』をかき、そのなかで〈解放の第一原則は、特殊部落民自身が先ず不当なる社会的地位の廃止を要求することよりはじまらねばならぬ〉とのべ、多くの部落の青年に共感をもってむかえられました。

#### 水平社の創立へ

こうして――一九二二（大正十）年十一月、柏原部落の駒井喜作の家に水平社創立事務所がおかれまして、ついに、三人は行動をはじめたのです。水平社という名称は、阪本が十七世紀の中ごろ、イギリスの民主主義革命の中心となった農民と、ロンドンの勤労大衆の組織Levellers（水平者）からとったものです。黒地に血にぬれたような荆の冠を染めだした荆冠旗は、西光が考えたものです。キリストが、十字架でハリツケにあったとき、頭のうえにむりやりかぶせられた荆の冠の血に染まったもので、部落民の受難をあらわしたものです。当時の人びとの暗いみじめな気持ちをあらわしています。また三人は『よき日のために』というパンフレットをつくり、京都の南梅吉、桜田規矩三、堺の泉野利喜蔵など全国の同志たちに送り、水平社の結成を呼びかけました。『よき日のために』は、各地の青年たちを一つに結びあわせるのに大きな力をはきました。

一九二二（大正十一）年二月二十一日、大阪中之島の中央公会堂で大日本平等会の創立大会がひらかれました。これは自主的な運動をおこそうという部落の動きに対抗して、融和団体の全国組織をつくろうとしたものだったのです。会場は紫のまん幕をはりめぐらし、壇上には大阪府知事、市長、東西両本願寺の執行などがいならび、約千人の人がつめかけていました。

まず、発起人のひとりであった当時の大阪時事新報社会部長の難波英夫があいさつにたちました。かれは、テーブルのうえに大きな風呂敷をひろげました。なかからたくさんの手紙の束がでてきました。大阪時事新報が部落問題をテーマにした記事をのせたところ、部落の人たちからたくさん投書がきたのが、その手紙の束だったのです。難波は、それをつぎつぎと読みあげ、

「この声なき声に対し、安っぽい同情だけではだめだ。腹の底からこみあげるいきどおりをもつ部落の人たち自身が、不当な差別の廃止を要求する、自主的な運動にたちあがることによって、部落は真に解放されるだろう」と話をむすんで壇をおりました。会場の人びとは、この思いがけない話に、あっけにとられました。すると、いきなり長髪でナッパ服の青年が、壇上にとびあがり熱っぽい調子ではなしだしました。その青年が西光万吉でした。かれは、「部落民自身がたちあがらなければならない」とうったえたのち、最後に、「全国に散在する部落民よ、団結せよ」と絶叫しました。すると二階のあちこちから、いっせいに五つのピラがまかれ、会場を花吹雪のようにまいおりたのです。ピラには、「水平社創立大会に参加せよ」「三月三日岡崎公会堂へ！」「全国の部落民団結せよ！」などとかかれていたのです。会場に、それをよるこびむかえる歓声があがりました。つぎつぎに壇上へのぼるものは、西光の訴えにこたえた演説ばかりでした。完全に大日本平等会創立大会は、水平社への参加をよびかける演説会にとつかわってしまったのです。じつはこの日から三日ばかり前に、西光、駒井らが難波をたずね、融和運動ではだめだから平等会をつくることをやめるようはなし、あらかじめ大会をのつとることを相談しておいたのです。

発起人のひとりであった寺田蘇人というひとはひどく怒って難波に文句をいいにやってきましたが、そのとき、寺田は、「エタの小僧になにができる」と口ぎたなくののりました。融和運動家といわれるひとの本心が、はしなくもあらわれたというべきでしょう。

ところが、その〈エタの小僧〉たちはりっぱに水平社を創立し、日本の民衆の運動に輝かしい一ページを飾ったのです。

ところで、当時、西光は京都にすみ、京都ガス会社の修理工をしていました。かれは入社の翌日から、班長の好意で島原遊廓の係にしてもらいました。班長は島原の

くすみやへ西光をつれていって、「なにぶんよろしく」と台所の人びとにひきあわせてくれました。かれはこうしてくすみやへ出入りし、天気の良い日には物干台にまでのこのこあがっていけるようになったのです。かれは京都の七条の櫛笥通りの、ある長屋の二階に住んでいましたが、その二階は、三部屋ほどの壁をぶちぬき紙箱工場になっていました。かれは、紙や道具がとこせまくおいてあるその部屋の隅の、ただ一枚だけしいてあった古畳をかりていたのです。かれはそこにふとん二枚と風呂敷包みをひとつおき枕さえない生活をしていました。

かれは身近な職工たちに、パンフレットやリーフレットを読むようにいわせました。それはくすみをめかされた狼の話などというわかりやすく書かれた社会主義のパンフレットだったのです。職工たちは喜んで読みました。そのうち、代金をくれたり、もっとほかにないかなどと催促するものもでてきました。かれは部落の解放とともに、働く人びとの解放をも、いっしょに考えていたのです。

京都の冬は、すごく冷えて寒いものです。その冬の二月の、あるうすら日のさす午後のことでした。くすみやの物干台は、うまいぐあいに高い壁や屋根が風よけになっていて、しずかで、ひなたぼっこにもってこいの場所でした。青いナッパ服でやせた体をつつんだ西光は、きょうもそこへのぼってきて、すわりこみました。しばらく、じっと考えこんでいましたが、やがて小さな手帳をポケットからとりだして、鉛筆をなめなめ、こまかい字を書きつらねていきました。それは「全国に散在するわが特殊部落民よ、団結せよ」ということばではじまる、あの有名な〈水平社宣言〉の草稿だったのです。

西光は、警察の目をくらまして宣言などの大事な文書を書くためにくすみやの物干台をえらんだのでした。やがて夕方、西光は、そこをおりていきましたが、ふたたび、かれは、その物干台にくることはありませんでした。

いよいよ三月が近づいていましたから、職をすてて創立大会の準備に全力をかたむけはじめたのです。

ついに三月三日がせまってきました。京都駅前の官本旅館では、阪本や西光のほか各地から集まった青年たちが、大会の準備にいそがしく働いていました。そこへ政府の役人がやってきたのです。

「部落対策の予算を二百万円ですから、水平社をつくることをやめてくれ」

と、役人はいうのです。阪本らは、それをきっぱりことわり、

「われわれが運動をおこしてもおこさなくとも、どんどん部落をよくする金を出せばいいのです」

とこたえました。

一九二二（大正十一）年三月三日、部落を部落の人間みずからの力で解放しようという、歴史的な全国水平社創立大会の日がきました。

まだ春の浅い当日、午前九時には激しくふった夜来の雨もはれました。朝から京都駅に列車が到着するたびに数十人、あるいは数百人からの団体の人びとがつぎつぎにおりてきました。あつしやハンテン姿のみすばらしい人たちがばかりで、なかには消防服の人や、在郷軍人らしい軍服姿の人もまじっていました。この人たちは、京都の岡崎公会堂でひらかれる創立大会に参加する人たちでした。

人びとは、赤や白の布に「解放か然らずんば死を与えよ」などと書いたのぼりをかかげ、長い列をつくって会場へ進みました。

会場の入口には、

三百万人の絶対解放  
特殊部落民の大同団結  
全国水平社創立大会午後一時より

と書いた大きな紙がはられてあって、これらの人びとを迎えました。会場の内は、紅白のまん幕がはられく解放く自由く団結くなどという文字をそめた旗が数しれず立っています。しかもそれより驚いたことは、広い会場には、すでにぎっしりと人びとがつままっていることでした。人びとは、これまで身をちぢめるようにしてくらしてきましたから、「こんなにも、たくさんの兄弟がいるのだ」と胸の中は喜びと、通いあう共感とで熱くなりました。すでに会場のなかは、開会まえから、強い興奮した空気にみちみちていたのです。当時の記録によりますと、この大会に参加した人の数は、ほぼ二千人といわれます。

午後一時、会場に激しい拍手がびびきわたり、開会がつけられました。

阪本清一郎は創立までの経過を報告し、綱領、宣言、決議などを採択し、各地方の代表が、つぎつぎに立って、

長い間いためられつづけてきた気持ちをぶちまけました。

西光万吉の書いたく水平社宣言くは、「長い間いじめられてきた兄弟よ」と呼びかけ「犠牲者がその烙印を投げかえずときがきたのだ」「われわれがエタであることを誇りうるときがきたのだ」と宣言し、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」とむすんでいます。二千の人びとは、声なく顔をふしてそれに聞きいていましたが、やがて、あちこちですすり泣きがきこえだしました。感激と、これまでのかずかずの苦しい経験を思い出してたまらなくなったのです。宣言を読みおわった駒井喜作は、相撲とりのようなからだをしていましたが、かれも壇をおりるのを忘れ、そこに立ちつくしていました。静まりかえった会場には、すすり泣きが流れていましたが、やがて、それは割れんばかりの拍手にかわっていきました。

地方代表にまじってひとりの少年が壇にあがりました。かれは、まだ十四歳で山田孝野次郎といいます。山田少年は、よくとおる声で、差別された体験をはなしました。そして、はなしている間に、かれの胸は悲しみでいっぱいになったのでしょうか。かれは、もうはなしつづけることができなくなりました。かれのほおを涙がとめどなく流れます。会場からもらい泣きの声がきこえ、壇上にいた委員たちも涙をぬぐいました。山田少年は、しばらく泣いていましたが、きっと顔をあげ、会場の人びとに大声で呼びかけました。

「いま、わたしたちは泣いている時ではありません」

はっとして人びとは少年の顔を見あげました。

「おとなも子どもも、いっせいにたって、この悲しみの原因を打ち破ろう。光り輝く新しい世の中にしよう」と声のかぎりさげびました。たちまち会場は激しいうしおのような拍手につつまれました。

この創立大会は、部落の人びとの心に炎をつけました。枯野に火を放ったように、水平社の組織はみるみる全国にひろがっていき、いっせいに人間を解放するためのたたかいにたちあがっていったのです。水平社が各地方で結成される速さは、当時の労働組合や、農民組合の結成される速さをうまわりました。それほど部落の人たちは、自由をもとめ平等をもとめていたのです。

このときかかげられた荆冠旗は、今日まで半世紀あまり、つねに民衆のなかにはためきつづけました。日本を差別のない明るい社会にする日まで、この旗は、なおもためきつづけることでしょう。

## ～ K・Tの「あゆみ」

K・Tは2Eの生徒である。2Eが公開授業「人間に光あれ」（実践記録⑤）に向けての取組みを始めたころから「あゆみ」とは別のノートを用意し同和問題にかかわる自分の思いを書きつづり担任の阿部先生に提出するようになった。以下はその一部である。阿部先生の返事は【】内に一部省略して書かせてもらった。

1月16日

その文を書いた子も私と一緒にの思いをしているんだなと思った。知られたくない、差別して欲しくない、そういうのって部落の人間の誰もが思うことだろう。でも、負けちゃいけない、きつと分かりあえると信じている。自分が本当のことが言えたらいいのに。そういう勇気ってというのがあったらすごいっておもう。自分は自分自身にもっと自信を持ち差別に立ち向かう人間でありたい。

【隠そうと思えば隠しながら生きていくことはできる。でもそれはいつまでも、隠すということでおびえながら生きていかなければならなくなる。学習会があるね。あの学習会をみんなはどう思っているんだろう。学習会は部落の子が差別を解消するために、その力を付けるために学ぶところ。だから周りの子は学習会にいている子は部落の子と思っているはずなんです。そのことをどう思っているかをみんなが言えなければ建前の勉強になる。（略）君が部落出身を言えないのは、今、周りに差別があるからです。言えば差別されるという感覚を君は肌で感じとっているからじゃないかな。今日書いてくれた君の言葉。この言葉を先生の支えにして頑張ります。】

1月18日

3人の部落出身者の過去のようにいじめられたことはありませんが、そのいじめられた経験が自分に無くともはがいたらしいと思いました。部落問題について先生が話しているときにいつも思うことは、みんなちゃんと聞いているのだろうか、本当にこんなので差別が無くなるのだろうかってことです。もう一つ。友達とは表面では仲良くしているけど裏ではどうなのだろうかなんてつい悪い方へ考えてしまうことがあります。はっきり言って友達を信じていないからだと思います。分かっているんだけどどうしても信じあえないんです。こんな事は先生だから言えるのかも知れません。同級生には本当に信じあえる子なんて誰もいないのだから…。しかし本当のことが分かりあえて真の人間って感じがする。人を信じられないのは私だけだろうか。

【そのはがいたらしいってというのがエネルギー—というか、がんばるちからになると思うんだ。いわれの無い差別で私達の仲間が差別されてきたんだと思うと怒りが込み上げて来るね。この怒りを勉強して差別を無くしていこうとする力にしていきたいと思う。人を信じるというのは確かに難しいね。みんなの心の中にはそれぞれいいにくい、しんどい思いがあると思う。部落問題にかかわればこのしんどい思いを超えなければ前にすまない先生は思っています。信じられないからしゃべれない、また、信じあえることを求めてしゃべる、ふた通りあると思います。君の今の迷いはすべて誰もが通る道だと思います。この道をもっと明るい方へ作っていかうじゃないか。】

1月21日

学活のとき、先生のいう言葉の一つ一つが胸につき刺さる感じがしました。自分の事

をいわれているような気がしたからです。実際、部落の人間でない人は部落の人間の辛さや悔しさが本当に分かっていない感じがします。ずっとまえ（今でも）親は「いじめられよらんか?」とか「友達おるんか?」って。どういう意味で私にいったのか分からなかったけどやっと分かったのです。こんなこともいわれました。「部落の子と仲良くしーよ。部落でない子はごっついずるがしこいけんな」どういうことでしょうか。私はそんなこと関係なしに友達は作っていますがはっきりいって少ないです。その友達もほとんどが部落の子です。親はよく「部落のものは口は悪いが根はちゃんとしとる。ほなけん、どんな苦しいことがあってもいじめにあっても、歯をくいしばって耐えろ。」って言う。だからどんなに苦しいこと、辛いこと、悲しいことがあっても頑張っていた。みんなの本当のきれいごとでない心の中で思っていることが知りたい。きれいごとはいらない、ほしくない。いつまでも人の下にいるようで嫌になるときがある。だから、みんなに分かって欲しい、部落の人間の心に痛みを。

【「人間に光あれ」を読んでいこう。最後の方に少年が「今、私達は泣いているときではありません。この悲しみの原因をつき破って光輝く社会にしよう。」と訴えています。きつい、厳しい差別を受けてきたお父さんお母さんを絶対に苦しめちゃいかんよ。水平社宣言の中にもある「我々が部落民であることを誇りうるときが来たのだ…祖先を辱め人間を冒瀆してはならぬ…」】

1月22日

授業に関係無いかも知れないけど…中学1年の時の出来事について語ってみます。例えば友達がA子さんとB子さんだったとします。あるときA子が私にひそひそ声で「なあなあB子って同和の子だろ?」そのとき胸がズキンツとした。まさか私もいわれるのかと内心ビクビクしていた。A子がいなくなって思い切ってB子に「なあ、A子がああB子のこと同和って言うたけど、同和え?」って聞いた。B子は「えっ、違うよ。〇〇に住んどるけんそー思われるんよ。」っていわれた。私は口が開いて「私部落の人間じゃ」って言ってしまったんです。いうんじゃなかったってとっさに思った。B子は「えー、うそー、ほんま〜?」って不思議そうに聞かれた。でも、B子は私から逃げなかった。部落の人間だと知られて友人を無くするのが一番怖かった。でもB子は普通にいつも通りしゃべりかけてくれた。逃げなかった。あのときの感動は忘れない。涙がでるほどうれしかった。A子をなぐって、B子にうれしくて抱きついて泣きそうになった。今、思い出すと、分かってくれる人間がいる、話せば分かってくれる。自分に自信が少し湧いてきたような気がした。

【今、先生が思うには差別の痛みが分からない人が半分、でも分かる人も半分はいると思う。若い人はとくに部落差別は絶対にいけないんだと思っている人が多くて、年配の人に誤った考えを持っている人が多いみたいです。同和教育もかなり進んできたので以前と違い明るい社会に近づいてきています。でも、学校で徹底してやっておかないとまた差別が再生産されていくのも事実です。今、私達がやるべきことは中途半端じゃなくて徹底してやりぬくことじゃないかといつも思っています。頑張ろう。そして友達、仲間を増やしていこう。

1月25日

西光は口先だけの部落解放を行っていない。融和運動みたいな同情で差別を無くそうという形だけの運動なら差別など無くなるはずがない。かっこうや形だけで差別が無くなると思う気持ちではいけない。西光みたいに体から（正面から）ぶつかってこいみたいに、ど〜んと心ががちりしているのが本当に差別を自らが無くそうとしている証拠だと思う。プリントに警察の尾行ってあったけどなぜ正しいことをしているのに尾行などするのか考えてしまう。コソコソするのは嫌だ。

話は変わるけどもうすぐ2月に2Eの公開授業がある。私はみんなの中で口先だけの意見発表する奴はいるかも知れないけど、先生、本当のことはいわせれんだろうな。一般の人の中には必ずいる「自分には関係無い」とか「差別を無くそう」なんて口先だけの自分勝手な奴がいる。一般の奴等は逃げている。その一般の曲がった根性はすぐになおすことはできない。「自分は最初差別していたけれど、もうこれからはしません。」っていう声は小6の時何度も聞いた。聞きあきたぐらいだ。口先だけのきれいごとなら誰でも言える。口先だけで言うやつらは逃げている。差別から逃げている。だから私はそういう人たちを弱い人間と思う。私は人の事を言える立場じゃ無いけれど、本当のことを言えずただ逃げる人間よりはずっとましだと思う。一般の奴等は自分が部落民より上と思っているかいらないか知らないけれど上下の考えはよせ！って言いたくなる。

はっきり言って先生も私は疑っている。口先だけって感じがしたからだ。きれいごとなんていらないから自分の本当の心に思っていること場を私達に聞かせて欲しい。そいでもって、手を挙げてその場だけの発表はやめて欲しい。発表したからいいっていうんじゃない。発表して自分が思っていることをみんなにいつて分かりあえるのが本当だと思う。授業だけで終わらせてはならない！

【一度授業の中で今思っていることを言って見てはどうだろうか。ものすごい強い印象を与えることは間違いないと思うんだけどな。西光さんが病にかかり生きる望みが無くなったことがあるらしい。そのとき父親は「ええ死に方をするためには、ええ生き方をせなならん。どんなに苦しくても真実を求めていきなさい。いきることは活動することである。」と言ったそうです。西光さんはこの言葉と坂本さんらの支えがあって見事に立ち直り、水平社運動を成し遂げました。先生は今部落差別を無くすために一番必要でやらなければならないことは心理的な差別だと思っています。つまり部落というイメージが悪い。そのことが現に問題になっています。そのイメージを変えていくというのが大きな仕事の一つです。だからきれいな言葉で部落を表現することもあると思いますがそれはそれで聞いて欲しい。それと、自分が部落問題にかかわってどう生きるかを話すのが本当の勉強だというのも分かっています。ありとあらゆることをこれからも全部話していくつもりです。君の言うとおりです。またいろいろ聞かせてください。頑張れる力になります。君のノートは。】

1月28日

お金なんかで運動は止めなかった。でも、そんだけまでお金だして運動をやめさせようとする政府の考えは腐っているって私は思う。政府もやっぱり逃げている、かかわろうとしない。すべて面倒なもめごとはお金で解決しようとしている。そこまでする

となんかなめられとる感じがした。部落の人間の気持ち金が解決できるか！って思う。部落の人間に生まれてよかったと思う。生まれてなかったら一般側の立場からきつと差別していたからだ。先生のいつていた部落民の生き方を考えた。「隠す、逃げる、死ぬ。」こんなの自由じゃない。人間らしくいきたい。今の私の生き方は「隠す」だ。隠そうと思えば嘘だつていえる。でも、隠してはいつまでも差別は続くだろう。正々堂々戦って考えてみた。できない。一人では何にもできない。前にも書いたけど35人目の前にはとても本当のことが言えない。弱い意気地なしの人間だと自覚した。いつも自分が嫌だつて思うことがある。自分もきれいごとかいて、えらいつて思って、差別に立ち向かっているかというのと立ち向かわずに逃げている。隠している。人の事なんて、誰も言えやしない。みんなどっか間違っている。もちろん私もだ。自分のどこが間違っているかを知つてなおしたい。

【差別される側から差別する側の心を覗くとどれだけ醜いか、君はそのことをきちんと捉えている。先生はいつでも差別から逃げることでできる立場にいる。とくに教師になりたちの頃逃げようとする自分と逃げたら自分の人間として値打ちが下がるんだと二つの心がけんかしてずいぶん苦しんだものです。逃げようとする自分がいるから自分で自分を苦しめた。それが差別する側、つまり差別者の苦しみです。授業で話したけど差別者には差別者の苦しみがあります。醜いドロドロした自分を見る、そんな自分が見える。これが先生の部落問題の出発点でした。昨日君が書いてくれたこと。すごく先生は反省しました。まだまだ自分が語れてないなと思いました。申し訳ないと感じています。君が堂々と自分の事が語れるクラスを先生は今まで作つてこれなかったのです。すまない。自分に怒っています。この怒りをまたエネルギーに変えていきたいと思います。】

1月29日

よく考えて見たら自分だけ被害者つて感じばっかで人のまあ差別者の立場など考えたことなかった。先生も苦しんできたんですね。つまり、どっちも苦しい。差別される人もする人も苦しんできた。そして現在も苦しんでいる。同じ人間どうしが差別しあう。みんなこんなことわかつてしているんやろか。でも、上と下の関係みたいに自分以下を求めるのは誰だつてあると思う。私もそうだ。「あいつよりましじゃわ」つて思う心が差別心だ。自分以下は求めたくなくても、口に出して言わなくても心の中では語っている。我ながら情けなく思う。話しは少しそれて差別解決は誰かがやるだろう、自分には関係ないとかいつたり思つたりしていかげんな奴等がいる。自分もそうだった。立ち直るのに2年かかった。森口先生のもうあの差別に対する取組み方にすつごい感動した。自分の思っている口先だけでない言葉をはっきりいつて本当に差別を無くしていかなければならないことを私たち生徒に教えてくれた。自分も心の中でおもっている言葉を今語らねば本当のことは分からないまま終わつていく。差別は生き延び続ける。誰かがやるつていう無責任さは私もある。本当の事が言えないから、誰かが言つたらいいだろうなんて。ずる賢い考えは部落の私でさえある。一般の奴等だけじゃない。自分は本当になにが言いたいのかうまく言葉に表わせない。それにただお笑いがしたくてみんなを笑わせているんじゃない。みんなには面白い奴と

しか思われぬ。だから私が真面目になったり真面目なこと言ったりすると不思議に思われ「ええー？どしたん急に」なんて言われたことがある。いまでもだ。むかつく感情を抑えて、ただ「へへへっ」っていつもの調子で笑う。今のクラスは、はがいたらしいやつも、いいやつも、暗い奴もでいろいろ個性のある人間ばかりでまとまりが無い気もするけれど、このクラスが好きや、男女をとわずに先生も含めて好きなんや。このクラスの全員をただ信じたい、今はみんなを信じたい。もち、信じあえる環境を作っていきたい。いま先生はいそがしそうやけど、この長文を読んでくれてありがとう。意見も書いてくれてありがとう。生徒の気持ちを支えていけそうな先生の一人だっと思う。先生自分にもっと自信を思ってください。

【差別する側の重みと差別される側の重みは全然違う。この世に差別のあるかぎり差別される側の人はずっとその重みをせおっていかなければならない。先生がしんどいという苦しみは例えば君の家の人が背負ってきた苦しみとは比較にならない。「部落のものは口は悪いが根はちゃんとしとる」という言葉の重み。それは人を信じて頑張っていきようとしたけれど、何度も何度も裏切られてきたってということだろう。先生の浅い人生の中で苦しみはいろいろあったけれどずっと部落差別を背負って来た人の苦しみには程遠い。それで今行き詰まりを感じている。藍住中学校時代に本当に部落差別を自分が背負っていきるって心に決めそういう生き方を今まで自分のできるかぎりの生き方をしてきたつもりです。でもまだまだその取組みの甘さが自分のなかに見えてくるんです。今、こんなにすばらしい君を目の前にして何が語れているんだろうか。何ができるだろう。ってことを考えると何かしなければならぬという焦りと自分の限界が見えてきてくるしい。君の言葉はともうれしい。じわーってきました。勇気がちょっぴりでできました。まだまだ弱い自分だけ部落差別を無くすという信念だけは持っている自信があります。部落差別は差別する側に責任がある。先生も同じ仲間としてこれからも認めてやってください。ありがとう。

1月30日

先生は一人熱心にしゃべってはったな。私はまだ自分は逃げていると思った。なぜなら、先生の目がまともに見えないからだ。目と目をみつめあえないとその人を信じてない証拠だと思う。いつも、差別とかの話になると、うつむく。何も悪い事してないのに。先生何で私が下向くか知つとるか？本音を言おう。私は「もう、聞きたくない！」って心の中で思っているからや。つらい…。でもそんな事口にだして絶対にいわない。だれにもな。みんなには悩みごともない顔をしていて本当の素顔は見せない。仮面かぶっている。しんどいときでも辛いときでもどんなときでもなぜ、みんなを笑わせているかという暗いイメージは好かんからや。つまり争いやもめごとを無くしているんや。Kはどうして笑わせているのか知らんけど、私はこういう深い理由がある。先生はただ笑わしている面白い奴じゃって思ってただろう。嫌われるのはいやじゃ。差別されるのはもつといやじゃ。部落の辛さや苦しさをわかってたまるか。って一時そう思っていたが、その辛さやくやしきの気持ちをちゃんと的確に伝えないと相手はずっと差別する。公開授業も明日や。自分はどう行動するなんてわからない。めちゃくちゃ。さて、自らが行動して真実（言える）が教えられるやろか。不安です。

でも黙っていても始まらない。

【君のことを先生がどこまで理解しているかということになるとこれまた自信は無い。けど、単に面白い奴じゃということはない。先生も同じことをしてきたことがある。自分のしんどさを嘆いていてもしいかたがない。しんどいから笑わせてやろう、笑ってやろうとかしてきた。酒を飲んでおどったりバカみたいなコトばかりしている。先生を本当に知らない人はあいつはバカだなんて思っているに違い無い。でも、そうでないことは自分が一番よく知っている。わかってもらおうと思わない。だから君の知っていることは少しはわかります。先生が君にたいして思うことは、今正直に「ごっつい子じゃ」というのが本音です。「人間」というものをよく知っているというか、強いというか、そしてやさしい。人の痛みがわかるやさしさ。佐藤先生は人の悲しみが見えなくて幸せになれるだろうか、といていたのを思い出す。明日は君の思うまままでいい。話す気になれなかつたら話さなくていい。このやろー、と感じたらそれを言葉で表現してください。2年生全体にはたくさんの仲間がいる。】

1月31日

本当のことってすっごい勇気がある。その勇気は私には無いと思う。いつだってこう言って逃げてきた。でも、これから先、ずっと逃げているのはちょっと苦しい。それに2年生全体で取り組んでいる意味が亡くなる。自分の思っている心の中のありったけの言葉を口から出すときだ。逃げていては始まらない。何も恥ずかしいことはない。同じ人間や。考えだつてある。自分のどういう考えかをわかってもらいたい。そのためにはやはり自分が言うべき。自らが手をあげて発言したい。頑張るぞ。

2月1日

勇気無かった。自分の言いたいことがいえなかった。とうとう私は逃げてしまった。頑張るぞって書いたのに…。いまさら後悔しても無駄だけど言いたかった。自分の腹の中にあるものを吐き出したかった。手も肩もどこか震えていた。心の中でさあ一手をあげろ挙げるんだっていついても手があがらない。余りの緊張に冷や汗がでた。森口先生はその緊張に気付いていたのか授業が終わったあと「Tよ、言いたいことがあったらいえよ」ってぼそつと言われました。そしてマイクで「私はこんなに苦しんでいるのに、言えない、手がどうしてもあがらない、」って言われたとき涙がでるほど辛さがにじんできた。涙がでないように上を向いたり時計見て紛らわせていた。泣きたかった。気がすむまで言って泣きたかった。そりゃ泣いては何も始まらないけれど自分が言えなかったのが悔しかった。自分が情けなかった。どうしようもない辛さは自分しかわからないし、人は頼れない。みんなに伝えたかった。部落ってというのがどんなものを…。今の自分のミスをくやんでくやんでしまう。情けない……。

【これが部落差別の重みかも知れない。先生も前から見ていて体がうずうずしている君を見ていて気持ちが伝わってきました。なぐさめはきつと君自身言って欲しくないと思うけどこれでおわった分けでなくこれからずっと続く。いつか君が立ち上がる日を信じたい。そして君は今燃えている。キラキラ輝いている。とくにこのノートを読ませてもらっていくうちのすごく成長していると思う。君が部落開放のリーダー的存在になっていくのが目に見えるようだ。】